

ヤマト王権中枢部の 有力地域集団

「おおやまと」古墳集団の伸張

Powerful Regional Clans Forming the Mainstay of the Yamato Polity :
Expansion of Influence of the Ōyamato Tumulus Clan

坂 靖

BAN Yasushi

はじめに

- ①ヤマト王権の成立
- ②5世紀のヤマト王権
- ③6世紀のヤマト王権

結び

【論文要旨】

本稿の目的は、奈良盆地を中心とした近畿地方中央部の古墳や集落・生産・祭祀遺跡の動態や各遺跡の遺跡間関係から、その地域構造を解明する（＝遺跡構造の解明）ことによって、ヤマト王権の生産基盤・支配拠点と、その勢力の伸張過程を明らかにすることにある。

弥生時代の奈良盆地において最も高い生産力をもっていたのは「おおやまと」地域である。その上流域で、庄内式期の纏向遺跡が成立する。その後、布留式期に纏向遺跡の規模が拡大し、箸墓古墳と「おおやまと」古墳群の大型前方後円墳の造営がつづく。ヤマト王権の成立である。「おおやまと」地域において布留式期に台頭したのが、「おおやまと」地域を生産基盤とした有力地域集団（＝「おおやまと」古墳集団）であり、地域一帯に分布する山辺・磯城古墳群をその墓域とした。ヤマト王権は、「おおやまと」古墳集団を出発点とし、その勢力が伸張していくことにより、徐々にその地歩を固め影響力を増大していく。

布留式期には、近畿地方各地に跋扈した在地集団に加え、奈良盆地北部を中心とした佐紀古墳集団、「おおやまと」古墳集団と佐紀古墳集団を仲介する役割を担った在地集団などが存在したことが遺跡構造から明らかであり、そのなかで「おおやまと」古墳集団と佐紀古墳集団が主導的立場にあったと考えられる。

5世紀には、「おおやまと」古墳集団は河内の在地集団を取り込み、さらにその勢力を伸張し、倭国の外交を展開する。そして、大和川の上・下流域一帯の広い範囲が生産基盤となり、倭国の支配拠点がおかれた。一方、近畿地方各地には、有力地域集団が跋扈しており、ヤマト王権の支配構造は、危ない均衡のうえに成り立っていたと考えられる。

そうした状況が一変するのが、太田茶臼山古墳の後裔たる継体政権である。淀川北岸部の有力地域集団は、近畿地方や北陸・東海地方の在地集団や有力地域集団と協調することにより、ヤマト王権の生産基盤は、畿内地方一帯の広範な地域に及んだ。そして、6世紀後半には「おおやまと」古墳集団と一体化することにより、専制的な王権が確立し、奈良盆地の氏族層に強い影響力を及ぼしながら、倭国を統治することになるのである。

【キーワード】 ヤマト王権、遺跡構造、「おおやまと」古墳集団、佐紀古墳集団、在地集団、有力地域集団、継体政権

はじめに

古墳時代前期におけるヤマト王権の支配拠点、奈良盆地東南部にあった。その当時の日本列島最大規模の古墳群は、「おおやまと」古墳群である。箸墓古墳・西殿塚古墳・行燈山古墳・渋谷向山古墳などの墳丘長200mを超える大型前方後円墳と、様々な規模の前方後円墳がある。渋谷向山古墳と箸墓古墳の間にある集落遺跡が、奈良盆地東南部の扇状地において約3km²という広大な範囲を占めた纏向遺跡である。

奈良盆地東南部は、その上流部にあたる奈良盆地中央部と一体の地域(『おおやまと』地域)であり、ここは弥生時代以来継続的に高い生産力を保持しつづけていた。そこに生産基盤をもつ有力地域集団こそが、ヤマト王権を成立せしめたのである。この有力地域集団を本稿では「おおやまと」古墳集団と呼ぶ。「おおやまと」古墳集団の呼称は、伊達宗泰氏が命名したものであり[伊達1999]、古墳そのものを指すものではあるが、本稿では有力地域集団の呼称としてこれを用いたい。そして、この「おおやまと」古墳集団は、古墳時代後期にかけて徐々に勢力を伸張し、その生産基盤を拡大していく。その過程を、近畿地方の遺跡の動態や遺跡間関係から証明することが可能である。本稿の目的は、奈良盆地を中心とした近畿地方中央部の古墳や集落・生産・祭祀遺跡の動態や各遺跡の遺跡間関係から、その地域構造を解明することによって、ヤマト王権の生産基盤・支配拠点と、その勢力の伸張過程を明らかにすることにある。

私は、これまでに、こうした遺跡の動態と遺跡間関係から地域構造(以下、遺跡と連関する地域構造を『遺跡構造』と定義づける)を探り、ヤマト王権やそれを支えた有力地域集団の政治・支配拠点を明らかにする試み(『遺跡学』)を続けてきた。方法論・個別論を含めた全般的な取り組みの契機となったのが、2009年に上梓した『古墳時代の遺跡学—ヤマト王権の支配構造と埴輪文化—』[坂2009](前稿1)であり、それとは別に、2008年に古墳時代全般の奈良盆地の集落遺跡の分布と動態、性格に言及した[坂2008](前稿2)。また、古墳時代前期～後期の大型古墳群の動態を中心に、近畿地方中枢部の古墳時代の遺跡構造について述べた[坂2012](前稿3)。

各時代別の取り組みとしては、弥生時代の拠点集落と古墳時代前期の集落について、奈良盆地の遺跡構造から古墳出現の背景を探ったうえで[坂2010](前稿4)、古墳時代前期後半の遺跡構造から、ヤマト王権と地域集団の動向について述べた[坂2011](前稿5)。古墳時代中期については、近畿地方の遺跡構造と渡来系集団の動向から、ヤマト王権の支配構造について考えた[坂2013](前稿6)。さらに、古墳時代後期については、奈良盆地北部[坂2015a](前稿7)と奈良盆地中～南部[坂2015b](前稿8)の遺跡構造について述べた。

ここでは、これらを総合し、文献の記述を参考にしながら通史的にまとめて、ヤマト王権中枢の実態に迫りたい。したがって、研究史や個別の問題については各論考によらねたい。なお、本稿の趣旨にあわせ、図面は、図10～13を除き新たに作成した。また、共同研究会では「倭王権」の用語が使用されているが、本稿ではヤマト王権を使用する。後述するように、私は庄内式期における倭国の政治中枢が奈良盆地に所在したとすることについて、否定的な考えをもっている。しかし、その後、奈良盆地東南部・中部を基盤とした勢力が伸張し、古墳時代中期の対外関係を主導したと

考えている。文字通り、奈良盆地を中心に王権が成立し展開したのであり、その意味で「ヤマト王権」が相応しいと考える。

また、古墳時代の時期区分は前期・中期・後期の3期区分を使用する。大王墓の主体部構造を中心に、前稿1による埴輪編年、寺沢薫氏による土師器編年〔寺沢1986〕、田辺昭三氏による須恵器編年〔田辺1966〕を採用する。絶対年代については、本稿のなかでも検討を加えることとするが、おおそ前期（3世紀前半～4世紀後半／竪穴式石室・割竹形木棺／埴輪1～2期1段階、／土師器庄内1式期～布留2式期）、中期（4世紀末～5世紀末／長持形石棺／埴輪2期2段階～4期1段階／土師器布留2式期～4式期／須恵器TG232型式～TK47型式）、後期（6世紀初頭～7世紀初頭／畿内型横穴式石室／埴輪4期2段階～3段階／須恵器MT15型式～TK209型式）と考える。なお、ヤマト王権の成立・展開過程についての上記の私見から、古墳時代前期については倭国の統治者として「王」、中期以降は「大王」の呼称を用いる。大王名については、便宜的に漢風諡号を使用している。氏族の成立は、6世紀以降と位置づけ、各時代の地域社会を構成した集団を在地集団、在地集団のうち一定の支配領域を確保した政治的集団を有力地域集団と称することにする。

①……………ヤマト王権の成立

1 纏向遺跡の検討

まず、纏向遺跡について検討する。寺沢薫〔寺沢2001〕・岸本直文〔岸本2014〕は、それぞれの絶対年代は異なるが、日本列島の東西が統合された倭国の中枢として、纏向遺跡が形成されたものと評価する。寺沢は3世紀における北部九州「イト倭国」からの倭国中枢の移動、岸本は2世紀初頭という極めて早い段階での倭国中枢としての纏向遺跡の成立を考える。さらに、森岡秀人〔森岡2015〕は、「原倭国」が、近江の北伊勢遺跡において日本列島の東西が統合され、その後に纏向遺跡が成立したと考える。

しかしながら、その形成期にあたる庄内式期の纏向遺跡について過大な評価はできない。庄内式期の纏向遺跡は、「おおやまと」地域において弥生時代拠点集落の生産基盤をそのまま引き継いだ大規模な集落遺跡ではあるが、地域の生産・開発拠点として機能していたにすぎず、他地域に多大な影響を及ぼしていたわけではない。また、当時の日本列島における最大規模の集落遺跡と意義づけることも困難である。その意味において、北部九州の30ヶ国を統合して倭国の外交を担ったという、邪馬台国の所在地を庄内式期の纏向遺跡に求めることは難しい。その後、布留式期になって、ようやく纏向遺跡の遺跡規模が拡大し、最古の大型前方後円墳である箸墓古墳が築造されるに及んで、日本列島の東西に影響力を行使しはじめたと考えられるのである。倭国の支配拠点として纏向遺跡が機能しはじめたのは、布留式期であって、この段階をヤマト王権の成立と意義づけることが可能である。絶対年代は、画文帯求心式神獸鏡や三角縁神獸鏡の製作年代などから、3世紀後半にそれをもとめるのが妥当であろう。

結論を先にのべたが、以下に纏向遺跡の遺跡構造を時期ごとに比較する。

「おおやまと」地域は、弥生時代の拠点集落が集中的に分布しており、奈良盆地内で最も開発が

進捗し、生産力が高い場所であった。その上流部に、ヤマト王権の支配拠点としての纏向遺跡が形成されたのは必然的であるといえる。纏向遺跡は、弥生時代の生産基盤がそのまま受け継がれ、形成されたのであって、「何もない」未開の地に突如として、遺跡が形成されたとする説は成立しない(図1)。

しかし、庄内式期の纏向遺跡は、北部九州ばかりでなく、近畿地方において、纏向遺跡からは大和川下流にあたる河内湖岸の遺跡、大阪府中田遺跡群、加美・久宝寺遺跡群との比較において、その規模、集落構造、生産力、対外関係、影響力いずれの点をとっても劣っていることは明白である。庄内式期の纏向遺跡は約1km²で、西日本の集落遺跡のなかでは大型とはいえるだろうが、東西方向の小河川や谷地形に分断され、居住適地は東西400m、南北100mほどの狭い太田微高地に限られている。それに対し、河内湖岸には、萱振遺跡(南部)・東郷遺跡・小坂合遺跡・中田遺跡

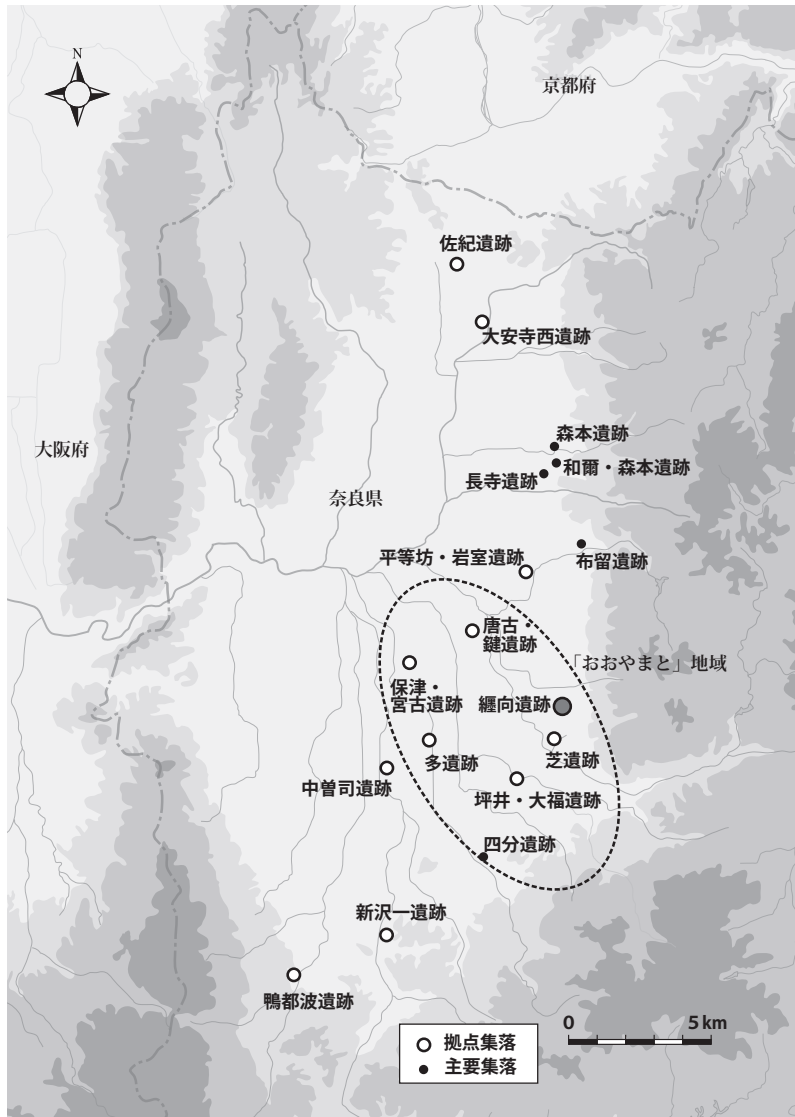


図1 奈良盆地の弥生時代の主要遺跡と纏向遺跡



図2 比恵・那珂遺跡と庄内式～布留式期の纏向遺跡

など庄内式期の集落遺跡が南北3.5km、東西1kmに亘って連続的に展開しており、中田遺跡群として評価することが可能である。さらにその西側の旧流路沿いの加美遺跡と久宝寺遺跡も庄内式期の集落域と墓域が隣接して展開している巨大遺跡である〔大阪府立弥生文化博物館2015〕。

同時期の北部九州の福岡県三雲・井原遺跡群、比恵・那珂遺跡群の規模や地形環境も、もちろん纏向遺跡に勝っている。比恵・那珂遺跡群は、庄内式期の道路遺構が検出されていて、纏向遺跡との

規模の格差は明らかである。纏向遺跡は布留式期によくその規模において、比恵・那珂遺跡群に勝る約3km²に及ぶ規模となるのである(図2)。

庄内式期の纏向遺跡には、海外交渉を示す資料が極めて稀薄である。日本列島における楽浪系土器の分布の東限は、島根県山持遺跡であり、これは北部九州を介して流入したのか、直接搬入されたのか、二説が考えられるであろう。北部九州では、上述の三雲・井原遺跡群、比恵・那珂遺跡群などで楽浪系土器が集中的に出土し、当該期の外交拠点であったと考えられる。とりわけ、三雲・井原遺跡群のなかの、三雲・番上遺跡の集中度は高く、外交に関連した施設の存在が想定され

ている。それに対し、纏向遺跡に楽浪系土器は皆無であり、外交拠点となったのは、布留式期以降と考えられる。遺跡内で、中国・朝鮮半島の関係資料が顕在的になるのは、庄内式期末葉～布留式期以降のことである。

ホケノ山古墳（墳丘長80mの纏向型前方後円墳）の副葬品や埋葬施設には、中国・朝鮮半島の強い関連性が窺えるが、その年代は3世紀半ば以降であろう。そこに西晋代の画文帯求心式神獸鏡の破鏡が含まれ、その製作年代は3世紀半ばと想定されている〔上野2008〕。日本列島への流入はその直後であって、ホケノ山古墳の築造年代は3世紀半ばを遡ることはない。実際、出土土器のうち小型丸底土器は、布留式の嚙矢を示すものとしてその報告文のなかで意義づけられている〔北山2008〕。

ところで、遺跡内各所でわずかながら、朝鮮半島南端部の三韓系土器が認められる。奈良盆地内では早い段階の資料である。ただし、すべて小破片であり、鍛冶関連遺物などを伴う場合もある。こうしたことから、これらは、対外交渉を示すものではなく、渡来系集団の遺跡内への流入を示すものであろう。纏向遺跡の鉄器生産は、鉄鏃など小型の鉄製品の生産に限定されている。そのため高度な技術を保持した専門的な工人層として位置づけられるわけではないが、布留式期に本格化するヤマト王権直営の鍛冶生産〔坂2014b〕の移植には一定の役割を果たしたものと考えられる。

後漢製の銅鏡・甲冑や、それをもとに製作された倭製の銅鏡・甲冑、倭特有の鉄製品・銅製品・石製品などが「おおやまと」古墳群に大量に副葬されるのも布留式期以降のことである。ただし、弥生時代後期、あるいは庄内式期の奈良盆地の地域集団が早い段階に海外交渉をおこない「長期保有」したと理解することも可能だろう。また、上野祥史氏は後漢鏡は早い段階に瀬戸内海の拠点を通じ、奈良盆地に集積され、最終的に近畿以東も含め全国に「分有」されたと理解する〔上野2014〕。弥生時代や庄内式期の奈良盆地に顕著な海外交渉の実態がないのに対して、北部九州及び河内湖沿岸の地域集団が、海外交渉をおこなった痕跡は明瞭である〔久住1988〕。前述のようにホケノ山古墳の築造が庄内式期の最末期あるいは布留式期の端緒と位置づけられ、ほどなく箸墓古墳の築造がおこなわれたと考えられるわけだが、この頃にまさにヤマト王権の中樞が形成されたのであって、北部九州や河内地域の在地集団を通じて、間接的に後漢鏡が入手されたものと理解される。

纏向遺跡のいわゆる纏向式土器の波及も庄内式期には極めて限定的である。V様式系土器の斉一化と、広範な波及範囲が評価できるのに対し、纏向遺跡の成立と期を一にした大和型庄内甕の波及は極めて限定される。庄内式期には、先に生産基盤を同一とした奈良盆地中央部の伴堂東遺跡・矢部遺跡などにすら及んでいない。ようやく、布留式併行期に布留式甕と同時にこれらの遺跡に波及するのである。

纏向遺跡における外来系土器は、その求心力を示すものとして意義づけられている。そして、それが庄内式期に遡るものがあることは否定しない。ただし、河内系・東海系のもものがその大半を占める。しかも、東海系といわれるもののほとんどは伊勢系〔川崎2014〕である。つまり、いずれも纏向遺跡の近隣地域であって、広域の地域間関係とは決していえない。そうしたなか、山陰系土器の割合が庄内式後半期に高くなる。同時期の乙木・佐保庄遺跡では外来系土器のなかで山陰系土器の比率が高い〔鈴木2006〕。さらに、奈良盆地北部の佐紀遺跡では、布留式期にいたって東国地域からの搬入土器の比率が高まる〔次山2000〕。その意味で、奈良盆地が、より広域からの求心力を

高めるのは布留式以降である。

外来系土器の搬入については、纏向遺跡だけにみられるものではなく、集落の大・小や地域に関わらずいずれの遺跡でも認められることである。奈良盆地において、東海系土器の搬入は、庄内式期を皮切りに、古墳時代中期の布留4式期にまでに及ぶ。庄内式期の伴堂東遺跡・藤原京右京九条二坊下層の事例では、土坑検出資料に伊勢系以外の土器様式が一括で搬入されており、遠隔地の住人の移住と定着が証明されるが、これは例外的なものであろう。奈良盆地とその周辺では、あらゆる場所の古墳時代の集落遺跡で東海系土器が出土しており、東海地域から物資の搬入がなされたことがわかる(図3)。

一方、纏向遺跡の外来系土器の集中については、伊勢を中心とした近隣からの土地開発と墳墓造営のための労働力や技術力の提供の結果である。また、纏向遺跡を核にして他地域へ土器が拡散した可能性もあって[川崎2014]、単純な交易拠点ではなく、ヤマト王権の中核としての機能が、近隣地域と強固な繋がりのなかでここに萌芽したといえるだろう。

纏向遺跡の端緒は、庄内式期における纏向大溝の掘削である。纏向遺跡は、まさに地域の農業生産拠点・開発拠点として成立したのである。その周囲に纏向石塚古墳(墳丘長99m)・矢塚古墳(墳丘長96m)・勝山古墳(墳丘長115m)という3基の纏向型前方後円墳が造営された。さらに、その東側の辻地区で祭祀土坑群や中心建物群などが形成される。そして、その後に箸墓古墳が造営され、遺跡の規模が拡大するとともに、中心建物群や祭祀施設は、さらに東側の巻野内地区に移動する。布留2式期には、再び辻地区にその中心地区が移動する。庄内式期の辻地区の大型建物群につ

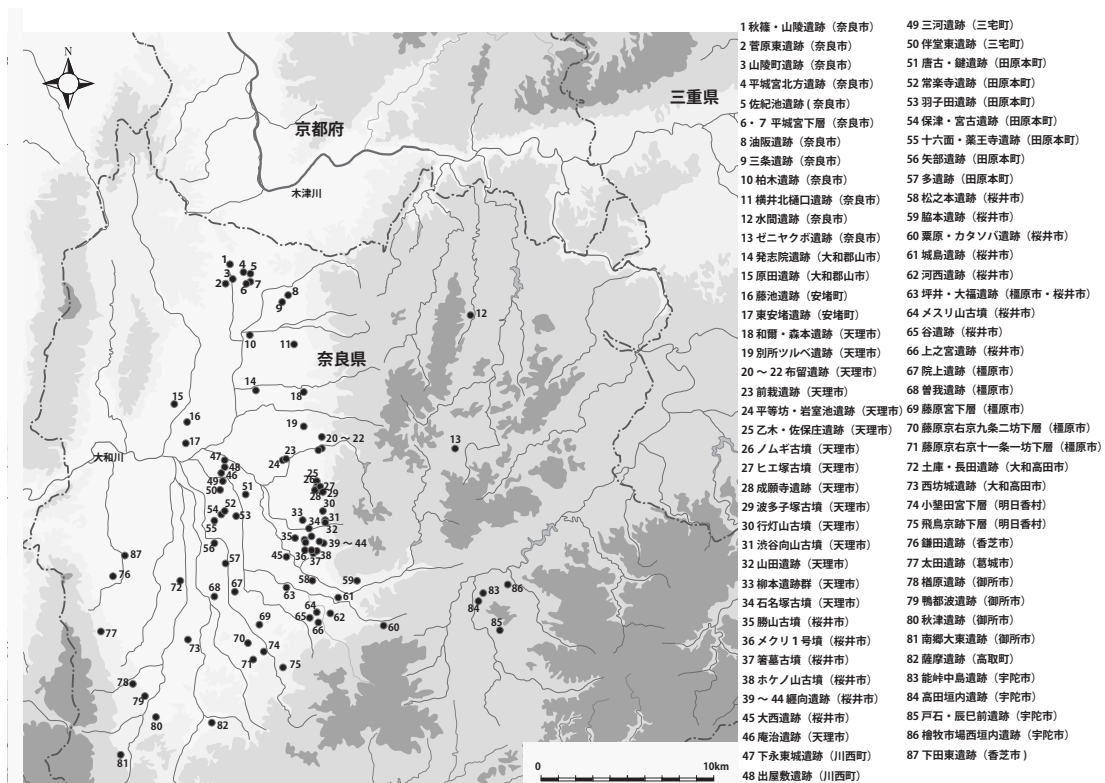


図3 奈良県下の東海系土器出土地

いての調査は比較的すすんでいるが、核心の布留式期についてはなお未解明の部分が多い。

こうした遺跡の形成過程にあつて、最大の画期となつたのが箸墓古墳の造営であることは多言を要しないだろう。そして、この大型前方後円墳の造営が契機となつて、埋葬施設としての竪穴式石室・割竹形木棺、外部施設としての埴輪や葺石、鉄製品・銅鏡・石製品などの大量副葬などのすべての要素が定式化して、全国各地に波及する。その後の求心力と影響力は、一定程度の評価が可能であつて、箸墓古墳の築造とヤマト王権の成立を繋げることに異論はない。

しかし、纏向型前方後円墳については、発生のプロセス、波及の範囲、そしてその影響関係については、なお不明な点が多い。前方後円墳の発生原理とともに、岡山県楯築墓・徳島県萩原1号墓・兵庫県養久山5号墳・京都府黒田古墳・大阪府安満宮山古墳などと同列に論ずべきものであろう。それは小範囲の在地首長の奥津城であり、地域間に序列関係を認めることはできない。それぞれの首長が地域と地域を繋ぐ役割を果たしていたのである。布留式期にいたつても、石名塚古墳・東田大塚古墳など纏向遺跡の周辺での纏向型前方後円墳の築造があつて、それらが大型前方後円墳の傘下にあつた人々の奥津城であることは明らかであろう。つまるところ、纏向遺跡周辺における纏向型前方後円墳の被葬者は、遺跡の外部には決して生産基盤を持ち得ない程度の存在であつたと考えられる。

2 「おおやまと」古墳集団と近畿地方の在地集団

ここでは、「おおやまと」地域と近畿地方中央部の遺跡構造から、布留式期に各地域において有力地域集団が台頭する状況を確認する。

まず、「おおやまと」地域である。「おおやまと」地域には、庄内式期～布留式期にかけての遺跡が集中して分布する(図4)。それぞれの遺跡において、土坑・溝・流路などから相当量の遺物が検出されていて、弥生時代からの豊富な生産力が維持されていたことがわかる。

このなかで、下永東城遺跡、保津・宮古遺跡、乙木・佐保庄遺跡で首長層に関連する遺構・遺物が検出されているほか、弥生時代の拠点集落と評価される唐古・鍵遺跡[清水2015]や多遺跡でも、庄内式期～布留式期の遺構・遺物が検出されている。とりわけ、多遺跡ではそれ以降、古墳時代中～後期に及ぶ遺構・遺物が検出されていて、古墳時代においてもこの地域の拠点的な集落として維持されていたと理解できる。そして、それぞれ各遺跡において首長が存在したと考えられる。

一方、その上流部にあたる纏向遺跡にはヤマト王権の「王」が存在したと考えられる。冒頭に述べた、日本列島最大規模の大型前方後円墳の被葬者である。先にみた「おおやまと」地域の各集落にあつた首長は、この「王」の直下にあつたことは明白であり、「おおやまと」地域の各集落と纏向遺跡の関係がそのまま「おおやまと」古墳集団の構成そのものであつたと理解されるのである。

その墓域は、磯城・山辺古墳群[今尾2009]である。磯城・山辺古墳群の範囲は、大和川合流点の島の山古墳(墳丘長200mの前方後円墳)を西限とし、「おおやまと」古墳群(大和《萱生》古墳群・柳本古墳群・纏向《箸墓》古墳群)と、鳥見山周辺の2基の大型前方後円墳(桜井茶白山古墳・メスリ山古墳)を含むその全体である。そして、この「おおやまと」古墳集団が、日本列島各地に影響を与える初期のヤマト王権の歩みをここから開始するのである。

ところで、この「おおやまと」古墳集団は、それぞれ独自の生産基盤をもつ近畿地方の他地域の

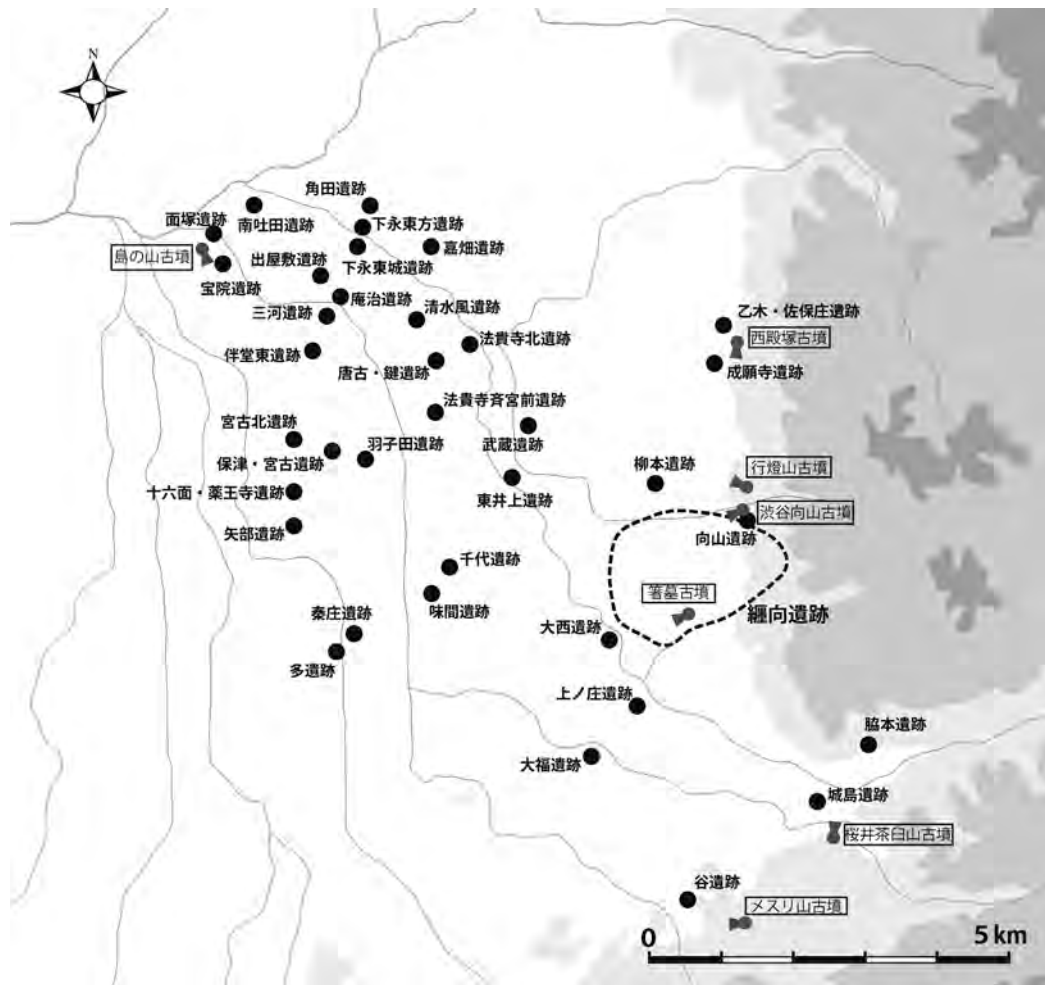


図4 古墳時代前期の「おおやまと」地域の集落と大型前方後円墳

在地集団と連動しながら、徐々にその地歩を固めていったと考えられる。そのことを弥生時代後期から古墳時代前期の集落動態から考えてみたい。

図5には、近畿地方中央部における弥生時代後期後半（V様式後半期）から古墳時代前期（布留式期）まで継続した集落遺跡を太字で示し、継続性が認められない大規模集落を細字で示している。太字で示した集落は、その長い継続期間から拠点的性格を保持しているといえる。また、遺跡名を枠線で囲んだものは、古墳時代前期の首長層の祭祀空間に関連すると考えられる方形区画が検出された遺跡である。

大和川・淀川流域の弥生時代の拠点集落の多くは、大和川下流域と奈良盆地のそれを除き、後期前半にいたって衰退する。典型的なのは、大阪府池上・曾根遺跡、兵庫県加茂遺跡などの事例である。また、かわって後期の高地性集落が近畿地方各地に展開するということもよく知られている事実である。弥生時代後期に、近畿地方の集落動態に画期があったことは間違いがないところであろう。

一方、大和川下流域と奈良盆地の環濠集落については、後期後半までその盛期が継続する。そして、後期末葉に環濠が埋められたことが、集落動態の大きな画期とされてきた。しかし、本稿で強

調したいのは、奈良盆地では庄内式・布留式期にいたってもなお集落としての営みが確認され、その拠点性が維持され続け、それぞれが前期古墳を成立せしめているという事実である。前述の「おおやまと」地域における山辺・磯城古墳群のほか、前稿4で示したように、平等坊・岩室遺跡、布留遺跡と杣之内古墳群、新沢一遺跡と新沢千塚500号墳（墳丘長62mの前方後円墳）、鴨都波遺跡と鴨都波1号墳（長辺19m×短辺14mの方墳）などそれぞれの地域で、弥生時代の生産基盤を引き継いだ在地集団により、古墳時代前期のうちに古墳が築造されている。

大和川下流域の中河内地域では、拠点集落である瓜生堂遺跡や亀井遺跡が庄内式期には衰退するものの、前述したように庄内式期において日本列島で最大規模をもつ中田遺跡群や、同様に屈指の規模をもつ久宝寺・加美遺跡群がある。これらの遺跡こそ、庄内式土器の発信源であると考えられ

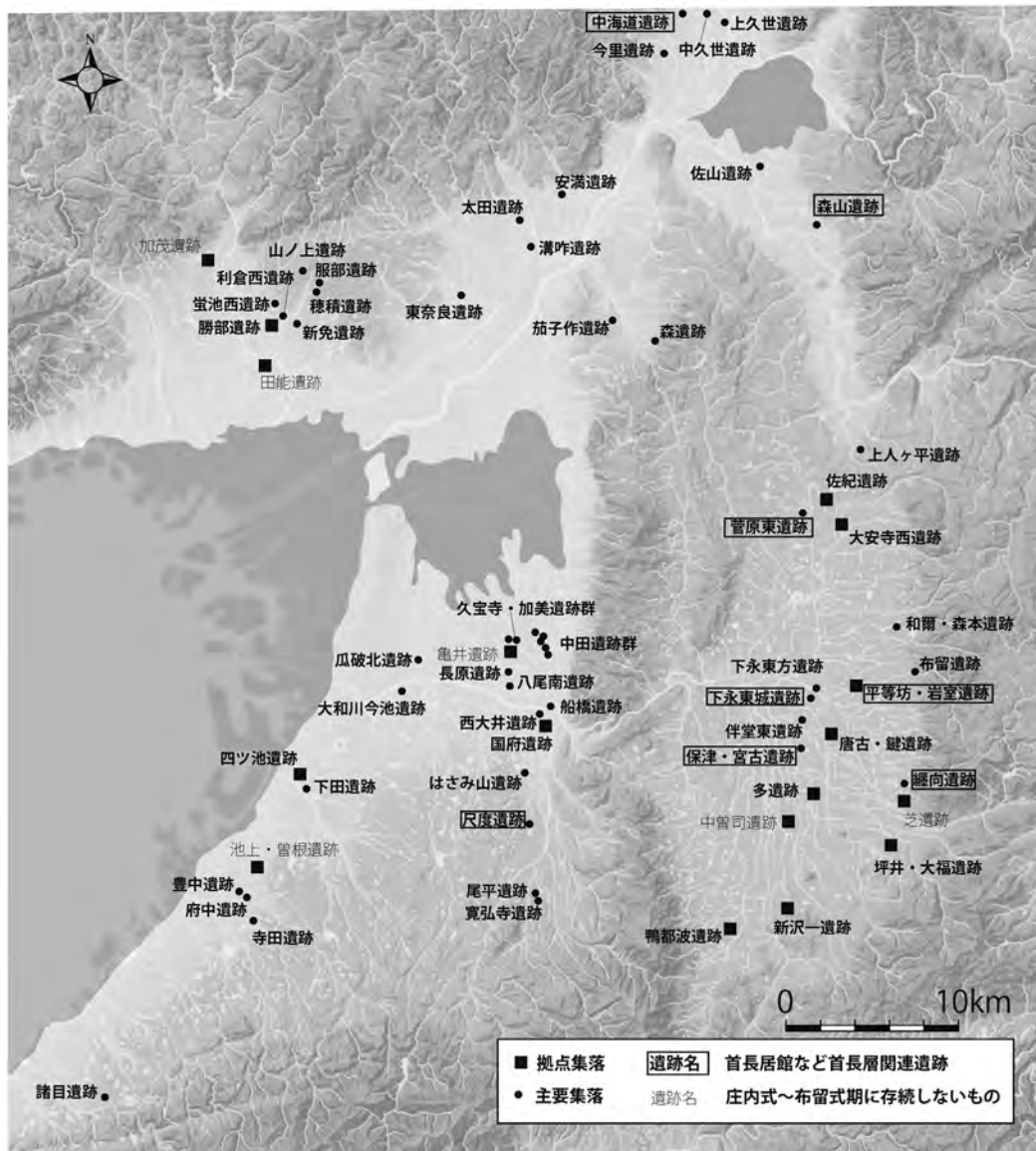


図5 近畿地方中央部における弥生時代～古墳時代の拠点集落・主要集落

るほか、全国各地の外來系土器が出土している。とりわけ、朝鮮半島南部地域の三韓系・三国系土器、吉備系土器や特殊器台などが卓越しており、遺跡には瀬戸内海を媒介とした交易拠点としての性格があり、そこに政治勢力が存在していたことが確認できる。ただし、これらが「おおやまと」古墳集団と一体であったわけではないことは、在地集団の政治拠点としての尺度遺跡の存在や、玉手山古墳群や庭鳥塚古墳（墳丘復元長 60m の前方後円墳）の存在から明らかである。つまり、大和川上流域の奈良盆地と下流域の河内湖周辺は、決して同一の生産基盤ではなく、個別に在地集団が存在していたと考えられるのである。「おおやまと」古墳集団が優位にあって、その主導権を握っていたことは確かだが、弥生時代後期～古墳時代前期の段階では、両者の間に圧倒的な格差があったわけではないだろう。

そのほかの地域においても、在地集団が跋扈していた状況が確認できる。和泉地域では、石津川流域で四ツ池遺跡・下田遺跡の存在があり、成立期の百舌鳥古墳群の前提となったものといえる。大津川流域は、池上・曽根遺跡に代わった寺田遺跡・府中遺跡などがあって、摩湯山古墳築造との関連が考えられる。摂津地域では、猪名川流域に数多くの集落遺跡があり、それが大石塚古墳・小石塚古墳の築造基盤であったことは疑いえない。また、安満遺跡と安満宮山古墳、森遺跡と森古墳群の関連性については、多言を要しないだろう。山城地域では、桂川下流の中久世遺跡・中海道遺跡などと、元稲荷古墳（墳丘長 94m の前方後方墳）・寺戸大塚古墳（墳丘長約 98m の前方後円墳）など向日丘陵の前期古墳を結びつけることができる。

このように、古墳時代前期にあっては「おおやまと」古墳集団は、奈良盆地内の小地域の政治的な集団にすぎない。時代を経るにしたがって、他地域の在地集団をその強大な生産力と軍力で圧倒するとともに、日本列島における東西・南北の地理的結節点にあることを活かしながら、前方後円墳を中心とした古墳文化を波及させて、その優位性を徐々に高めていったといえるだろう。

3 佐紀古墳集団の動態

次に、奈良盆地北部の遺跡構造をみておきたい。前稿 5 で示したように、布留 2 式期には、奈良盆地北部にもヤマト王権の支配拠点が形成され、構造的にはヤマト王権は二箇所の支配拠点を擁することとなる。

奈良盆地北部における弥生時代の拠点集落や、弥生時代後期～古墳時代前期の集落動態についてはいまなお不明な点が多いが、この地も決して不毛の地ではない。平城宮下層の佐紀遺跡は、弥生時代の拠点集落だが、遺構の密度は低い。しかし、古墳時代前期～中期の溝で、多量の遺物が検出されている。また、大安寺西遺跡でも、弥生時代前期～後期の遺構が継続的に検出されており、拠点集落と評価される〔川上 2006〕。さらに、平城京下層にも弥生時代後期～古墳時代前期の小規模集落が点在していたことが知られる〔安井 2007〕。そして、古墳時代前期のうちに、「王墓」という評価もある佐紀古墳群の西群の築造がはじまり、首長の政治空間に関連する方形区画とその周辺に 1km² に達する集落域を擁する菅原東遺跡や、時期は不確定ながら西大寺東遺跡などのヤマト王権の支配拠点が形成されるのである。

ところで、山城地域南部の木津川東岸部に椿井大塚山古墳（墳丘長 175m）・平尾城山古墳（墳丘長 110m）という古墳時代前期の前方後円墳があって、前者に 33 面という多量の三角縁神獸鏡

が副葬されていたことから、早くからヤマト王権中枢との関わりが着目されていた。ごく早い段階にヤマト王権の広域支配が貫徹されていたとみるなら、奈良盆地東南部に本拠をおきながら、木津川水運と関連する交通の要衝に墓域をおいたとみることも可能であろう。実際に、古墳の築造規格などを含め、「おおやまと」古墳群との親縁性は高い。



図6 佐紀古墳集団と奈良盆地東北部の政治勢力の動態
○は大型前方後円墳

しかしながら、奈良盆地北部の在地集団の動向は、決して無視されるべきものではない。木津川東岸部の椿井大塚山古墳・平尾城山古墳が築造された地域においては、椿井遺跡で弥生時代後期の遺構が確認されるものの、庄内式期～布留式期については皆無である。南へ1kmほどの上北北遺跡において、古墳時代前期の遺物が僅かに検出されているにとどまる。こうしたことから、これら古墳の生産基盤は、地理的にみても、奈良盆地北部に求められるべきであって、この地域の在地集団の首長の奥津城であったと考えられるのである。ここでは、この奈良盆地北部と山城地域南端部一体に生産基盤をもつ在地集団を「佐紀古墳集団」と呼びたい。

この佐紀古墳集団と、「おおやまと」古墳集団の中間に、さらに異なった政治勢力が存在していたことも明白である。弥生時代の拠点集落遺跡である平等坊・岩室遺跡が、古墳時代前期にまで継続し、布留式期には首長の政治拠点である方形区画が形成されるにいたる。さらにその上流部では、布留遺跡や古墳時代前期の柚之内古墳群が形成される。一方、弥生時代後期に長寺遺跡や森本・窪之庄遺跡を形成した在地集団は、古墳時代前期のうちに栗塚古墳（墳丘長100mの前方後円墳）を築造し、その後、和爾遺跡の周辺に前期～中期の前方後円墳を次々と築いて有力地域集団へ成長していく。和爾遺跡は、約3km²に及ぶ巨大集落遺跡であり、中期前半には首長の政治空間を確保して、有力地域集団の支配拠点として機能することになる。この有力地域集団は、古墳時代前期～中期のうちに下流域の農業生産ばかりでなく、東部山間部の矢田原遺跡などにおいて木材の切り出しを行なったうえで中継地を確保し、木津川へ至るルートを掌握していた[青柳2007・2010]。中継地には茗荷遺跡などの集落遺跡のほか、製塩土器を大量に検出した和田ナカドヲリ遺跡、ルート上には、大柳生宮ノ前遺跡・阪原坂戸遺跡などの導水施設や湧水施設を備える祭祀遺跡が存在する。こうした政治・経済基盤を背景に、東大寺山古墳の後漢の中平二年銘大刀に象徴されるような海外交渉を積極的におこない、その政治力を如何なく発揮したものと考えられる。

かくして、箸墓古墳・西殿塚古墳（墳丘長230m）・行燈山古墳（墳丘長242m）・渋谷向山古墳（墳丘長300m）という大型前方後円墳を次々に築造した「おおやまと」古墳集団は、和爾遺跡を支配拠点とした有力地域集団の仲介を得て、この佐紀古墳集団を取りこんで、その影響力を徐々に高めつついったことは容易に想像ができるだろう。そして、布留2式期～3式期にかけ、佐紀古墳群ではその築造順序は確定していないものの、五社神古墳（墳丘長275m）・佐紀陵山古墳（墳丘長207m）・佐紀石塚山古墳（墳丘長219m）・宝来山古墳（墳丘長227m）という大型前方後円墳が築造される。それは、「おおやまと」古墳群の造営の時期と一部重なっている。

ヤマト王権は、布留2式期までの間は、奈良盆地の東南部と北部という、日本列島の地理的要地に2カ所の支配拠点をおいていた。そして、その中間の政治勢力が介在しながら、その東西に対し影響力を行使するようになったと考えられる。とりわけ、鱈付円筒埴輪・初期の形象埴輪などの各種埴輪の波及の核としての役割や、あるいは北陸地方産の良質の緑色凝灰岩製腕輪形石製品、後漢鏡やそれを大型化した仿製鏡、筒形銅器や巴形銅器、方形板革綴短甲などの前期古墳にみられる各種副葬品の生産や波及の核としての役割が想定され、日本列島各地のみならず、中国・朝鮮半島南部地域との交渉においても、「おおやまと」古墳集団と佐紀古墳集団が、各在地集団の主導的な立場にあったことは容易に想像できるであろう。

②……………5世紀のヤマト王権

1 河内の在地勢力の動態

5世紀のヤマト王権は、讃・珍・濟・興・武という五王が東晋・南宋など中国南朝に朝貢し、その冊封体制下にはいる。5世紀にはこの五王が、日本列島及び朝鮮半島に一定程度の覇権を及ぼし、中国と交渉したことは確かであろう。そして、この五王の墳墓が、古市古墳群や百舌鳥古墳群の大型前方後円墳と連関することも確かである。問題は、この五王の出自であり、騎馬民族説のような全くの外来集団によるものは別として、河内地域の在地集団をどのように評価するかが、問題を解くひとつの鍵である。

前述したように、古墳時代前期において、古市古墳群のある大和川下流の中河内地域と、百舌鳥古墳群のある石津川流域の和泉地域においては、それぞれ個別に異なった生産基盤をもつ在地集団が跋扈していたと考えられる。

一方、古市古墳群と百舌鳥古墳群において最初に築造された大型前方後円墳が、津堂城山古墳（墳丘長208m）である。古市古墳群と百舌鳥古墳群は、正しく東西にならび、その中間にも大型前方後円墳があること、それぞれ関連しながら連続的に大型前方後円墳が築造されていることなどから、同一の「墓地域」のなかに次々と形成された大型古墳群といえるだろう〔森1975〕。そのようにみるなら、津堂城山古墳が造営された段階で、大和川流域と石津川流域の生産基盤は一体となり、それぞれに跋扈していた在地集団も統合されたと考えられる。このとき、奈良盆地の「おおやまと」古墳集団は、佐紀古墳集団をとりこんで一体となっていたわけだが、それとは別の動きであったとみてよいだろう。さらに、これらの中間の奈良盆地西南部には馬見古墳群があつて、前期のうちに新山古墳（墳丘長127mの前方後方墳）、佐味田宝塚古墳（墳丘長111.5mの前方後円墳）が築造され、津堂城山古墳とほぼ時期を同じくして大型前方後円墳である巢山古墳（墳丘長約220m）が造営される（図7）。「おおやまと」古墳集団が一定の優位性を保ってはいたことは間違いないが、それぞれが大型前方後円墳を築造するまでにいたっており、前期後半～中期前半のヤマト王権中枢は、危ない均衡を保っていた状況が想定される。

2 倭の五王と有力地域集団

こうした状況を一変させたのが、日本列島第1位・第2位の規模をもつ巨大古墳の造営である。この段階に、ようやくヤマト王権の生産基盤が、河内湖周辺一帯と大和川・石津川流域の広い範囲に及んだと考えられる。この時期の遺跡構造により、そのことが証明される。

第1位・第2位の規模をもつ巨大古墳とは、いうまでもなく古市古墳群の誉田御廟山古墳（墳丘長415m）、百舌鳥古墳群の大山古墳（墳丘長486m）である。第3位の規模をもつのが、百舌鳥古墳の上石津ミサンザイ古墳（墳丘長360m）で、前者の規模が突出することがわかるが、まず埴輪編年3-2期のうちに上石津ミサンザイ古墳が築造され、その後誉田御廟山古墳（3-3期）、大山古墳（3-3期）の順序で築造されたと推定される。それぞれの古墳の内容において知られる内容

が異なるため、単純な比較はできないが、誉田御廟山古墳の埴輪が窖窯焼成である事実や、大山古墳に三環鈴や金銅装甲冑、全身像としてのはじめての人物埴輪が認められることなどから、朝鮮半島の強い影響を受け、馬匹生産・窯業生産・金銅製品・武器、武具生産が変革する段階と、誉田御廟山古墳と大山古墳の築造とが同時期の関係にあると考えられるだろう。それに呼応して、上町台地上の法円坂遺跡の大規模倉庫群、百舌鳥古墳群内の鉄器生産工房である陵南遺跡、その背後の陶邑古窯址群、古市古墳群の対岸にある鉄器生産工房である大県遺跡、奈良盆地の中央部にある大規模玉生産工房である曾我遺跡など、大王が直営する手工業の生産拠点や流通拠点が、機能したと考えられる（図8）。

河内・和泉地域で最新の武器・武具が生産され、いち早く、朝鮮半島から騎馬文化を受け入れ、馬匹生産がおこなわれる一方、馬具生産が開始される。このほか、ガラス製品の生産、金銅製品の生産、窯業生産などいずれも朝鮮半島由来の技術が河内湖経由で導入され、ヤマト王権の主導のも

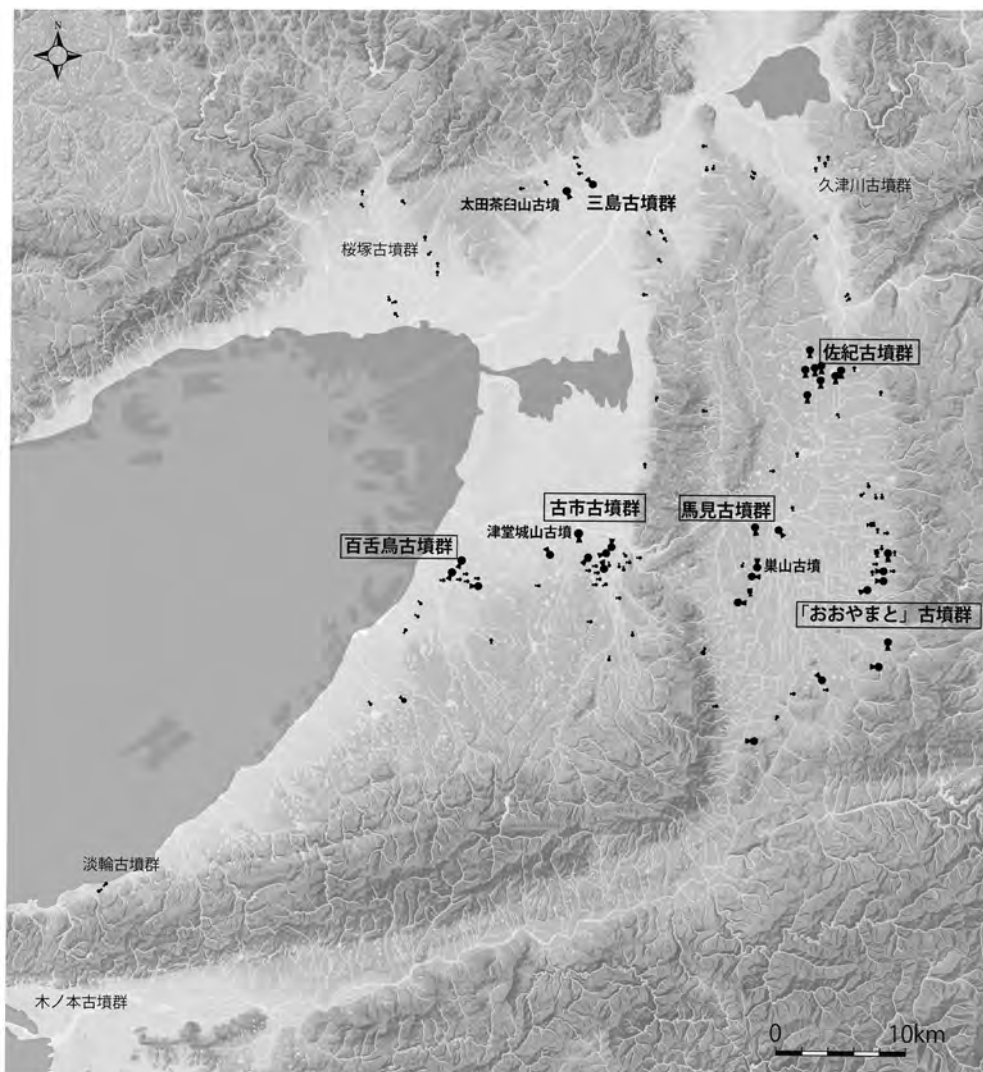


図7 近畿地方の大型前方後円墳の分布

と、大規模な生産がここで開始され、日本列島各地に強い影響を与える。こうした墳墓を築いた王の支配拠点が、河内・和泉地域にあったのか、それとも奈良盆地にあったのか、それこそが河内政権論の核心であろう。先取の気性に富み、最新の手工業生産技術と生産力を誇り、当時日本列島最大の大型前方後円墳を築いた河内・和泉地域にも支配拠点があったことは確かである。一方、奈良盆地においては、伝統的な生産基盤はそのまま確保されており、さらに朝鮮半島系の渡来系集団が河内・和泉地域と同様に流入して、大規模開発がさらに進捗し、その生産力が向上したのである。それは、5世紀代における奈良盆地周辺の韓式系土器の分布から証明される〔坂2016a〕(図9)。奈良盆地の農業生産こそ、大王の生産基盤そのものであり、文献における諸宮の記載からもその支配拠点が奈良盆地にあったことは間違いがないところであろう。

大山古墳の築造を最後に、墳丘長400mを越える巨大古墳の築造は終わり、ここでこれまでの古墳築造の巨大化が中断する。倭の五王と『古事記』・『日本書紀』の系譜が一致しないなかで、その

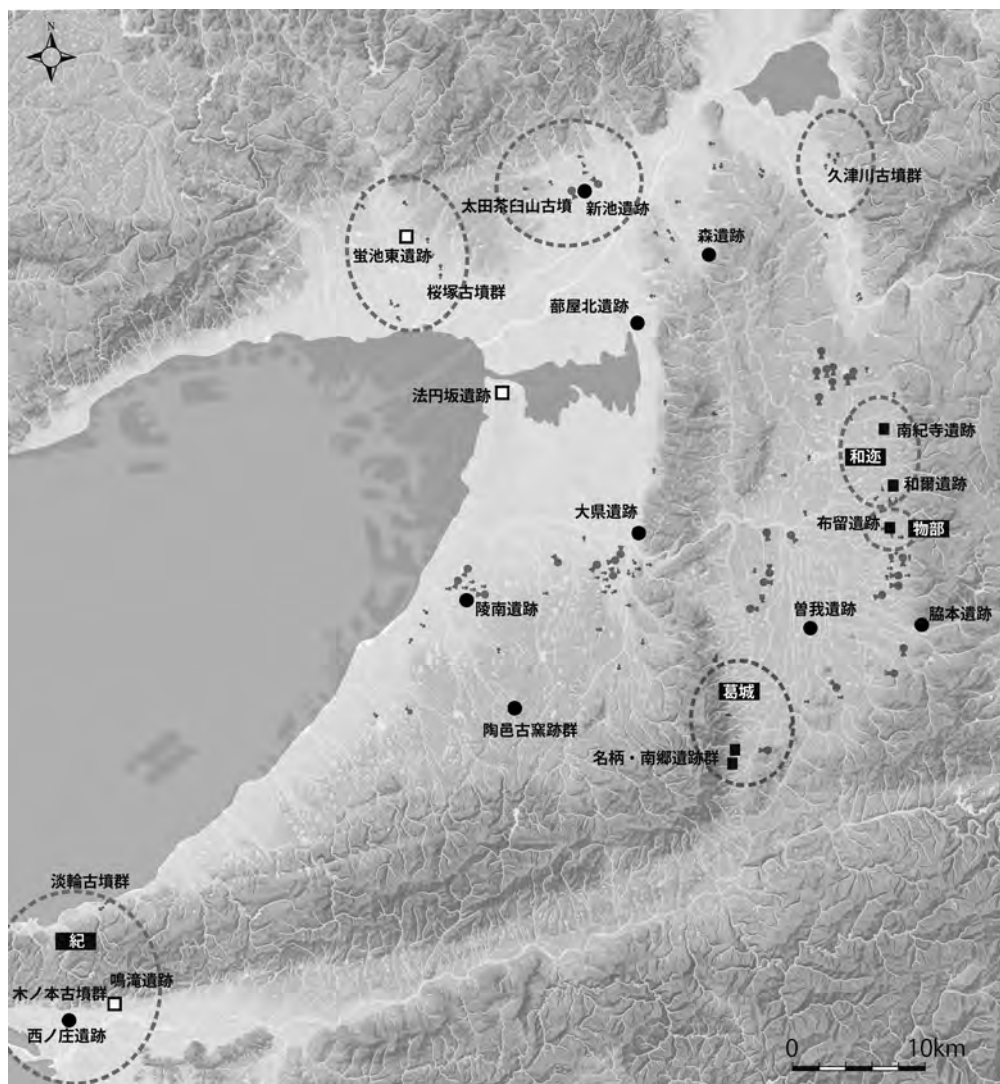


図8 5世紀における近畿地方中央部の遺跡構造(破線の範囲が有力地域集団の領域)

比定は困難である。あえて、倭王讃を仁徳（大鷦鷯）とし、その墳墓が大山古墳であると仮定した場合、それ以降の大型前方後円墳の築造順序から倭王珍は土師ニサンザイ古墳（墳丘長約 290m）、済は市野山古墳（墳丘長 230m）にあてられる。その次代の興は、私は市野山古墳との関連から、佐紀古墳群のヒシャゲ古墳（墳丘長 219m）の可能性が高いと考えている [坂 2013b]。佐紀古墳群においては、ヒシャゲ古墳の前段階にウワナベ古墳（墳丘長 205m）が築造されており、これがほぼ大山古墳と同時期の築造であり、墳形も類似することから、その実在性や説話の信頼性から問わねばならないが、那良山に葬られたという仁徳の皇后である磐之媛の墳墓である可能性も浮上する。そうすると、大王とその近親者の墳墓が百舌鳥古墳群と佐紀古墳群にあったことになる。いずれにせよ、倭の五王の時代に、古市・百舌鳥古墳群、佐紀古墳群に加え、その中間の馬見古墳群も含めた古墳群が大王とその近親者の墓域となったのであり、大王の生産基盤もこの広い範囲に及んだものと考えられる。

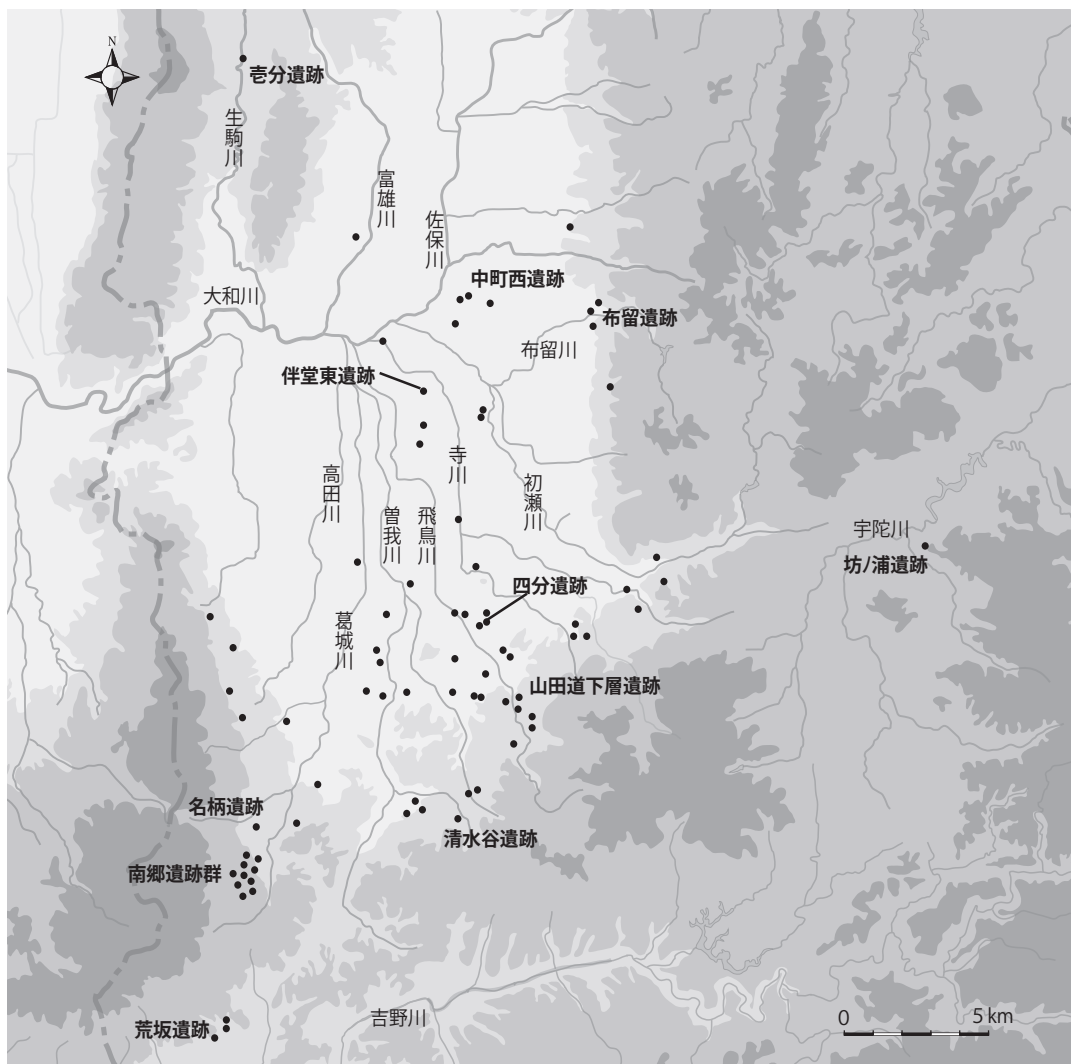


図9 5世紀における奈良盆地周辺における韓式系土器の分布



図10 古市古墳群の分布



図11 百舌鳥古墳群の分布



図12 佐紀古墳群の分布

さらに、倭王武については、稲荷山鉄剣名のワカタケルであり、これが『日本書紀』の大泊瀬幼武（雄略）天皇と一致することは明らかである。かねてより、脇本遺跡において5世紀代の大型建物が検出され、雄略天皇の泊瀬朝倉宮との関連が注目されてきたところであるが、近年の発掘調査で石垣を伴う区画施設が検出され、倭王武の支配拠点とみることに異論はないだろう。一方、その墳墓は、古市古墳群・百舌鳥古墳群のいずれかの大型古墳である。大型前方後円墳の系譜とその位置関係からみれば、古市古墳群の岡ミサンザイ古墳（墳丘長242m）をこれにあてることが妥当だろう。

かくして、私は伝統的で強固な生産基盤をもつ「おおやまと」古墳集団を起源とする在地集団が、河内の在地集団を取り込む形で、ヤマト王権の中樞が形づくられたものと考えている。

しかしながら、奈良盆地の西南部や東北部には氏族の淵源となる有力地域集団が存在し、それぞれ個別の生産活動をおこなっていて、これらは大王を支えつつも時には対峙していたと考えられる。それが、東北部の布留遺跡を支配拠点とするのちに物部氏と呼ばれるようになった有力地域集団、和爾遺跡・南紀寺遺跡を支配拠点とするのちに和邇氏とよばれるようになった有力地域集団、西南部の名柄遺跡と南

郷遺跡群を支配拠点とするのちに葛城氏と呼ばれた有力地域集団であり、それぞれ5世紀代のヤマト王権を支えた強大な政治勢力であったと考えられる〔坂・青柳2011〕。

さらに、奈良盆地及び和泉・河内地域の外縁部においては、支配拠点についてはその存在が明確ではないが、淀川流域北岸部の有力地域集団が、古墳時代中期に、地域を統合しながら大きく成長したことが、三島古墳群で最大規模をもつ前方後円墳である太田茶臼山古墳（墳丘長230m）の存在で証明される。太田茶臼

山古墳に供給した埴輪生産地が新池窯であり、有力地域集団の生産拠点であろう。また猪名川流域の桜塚古墳群では、古市・百舌鳥古墳群と同様の新式武器・武具が副葬されているが、その近傍には蛸池西遺跡など中期の大型倉庫群があって、前期以来の在地集団がさらに活発な活動をしている様相がよみとれる。また、紀ノ川河口部においては、北岸部の木ノ本古墳群と山を越えた淡輪古墳群を墓域とする有力地域集団が跋扈していたことが明らかである。西ノ庄遺跡での製塩、楠見遺跡の窯業生産、鳴滝遺跡での大型倉庫群は、その生産・流通拠点であり、紀ノ川北岸一帯は、大陸・朝鮮半島へ繋がる交通上の拠点を支配した有力地域集団の支配拠点であったと推定できる。のちに、紀氏と呼ばれた有力地域集団である。木津川流域の久津川古墳群も、5世紀の大型古墳群であるが、前期以来の生産基盤を引き継いだ在地集団が5世紀に有力地域集団として成長してきたことを示すものといえる。

倭の五王は、こうした近畿地方における有力地域集団と協調しながら、日本列島の各地に強い影響力を行使したと考えられる。近畿地方の諸勢力のうち、のちに葛城氏や紀氏と呼ばれた集団は、瀬戸内海を通じ、朝鮮半島と繋がっていたと考えられる。これらは、ヤマト王権の外交とは異なって、独自に技術者集団を招聘したもの〔田中2002〕とされるが、私はさらにこれをすすめて、百済王権の権力外にあった自由往來の渡来系集団を獲得したものと考えている〔坂2013a〕（前稿6）。こうした集団が、渡来系集団を掌握し、独自の「家産」をおこなうことにより強大な権勢を保持した〔坂2012b・2014〕のである。前期のそれよりは、ヤマト王権の生産基盤が広域化・安定化したとはいえ、ヤマト王権の支配構造は、やはり危ない均衡のうえに成り立っていたといえよう。

③……………6世紀のヤマト王権

1 継体政権の支配拠点と遺跡構造

6世紀になって、ヤマト王権の生産基盤が大きく変動する。それが、継体政権の成立によるものであることは多言を要しないだろう。『日本書紀』によると、継体（男大迹）は、近江・越前で生まれ育ち、尾張連草香の娘を元妃とした。さらに、樟葉宮・弟国宮・筒城宮、仲介者としての河内馬飼首荒籠の記載がある。考古資料からも北陸・東海地方及び近江・山城及び淀川流域一帯に、その生産基盤があり、継体擁立を支持した在地集団があったことが確認されている。とりわけ、注目されるのが淀川北岸部の三島古墳群にある今城塚古墳であり、これは継体自身の生産基盤に築かれたものとみられる。

6世紀前半代において日本列島最大規模をもつ前方後円墳の今城塚古墳（墳丘長181m）が、継体陵であることはここであらためて述べる必要はないだろう。前述したように、三島古墳群においては5世紀代に最大規模をもつ太田茶臼山古墳が築造されるが、その生産基盤がそのまま引き継がれ、今城塚古墳が造営されたものと考えられる。新池窯など古墳造営に関わるものばかりでなく、農業生産などが引き継がれたと推定されるのである。このように継体は淀川流域に生産基盤をもつ有力地域集団の後裔であって、山城・近江及び北陸・東海などの在地集団の支持を得て、大王に擁立されたと考えられる。こうして、この生産基盤が旧來の生産基盤と一体となって、ヤマト王権中

枢の生産基盤がより広範なものとなって、より強固な権力が醸成されるにいたったのである。この範囲こそ、のちの「畿内」である。

この継体擁立にむけては、旧来の勢力との対立的な構図が示され、その影響力が行使できなかったという想定もあるが、決してそうではない。確かに、継体擁立前後の大型前方後円墳の分布を見ると、奈良盆地東南部・東北部・西南部及び古市古墳群に集中しており、旧来の勢力が絶大な力を保っていたことがわかる（図13）。古市古墳群と奈良盆地西部は雄略以降の大王及びその近親者の墓域であり、奈良盆地東北部は、のちの物部氏に関わる有力地域集団の支配拠点と墓域が、それぞれ形成されている。

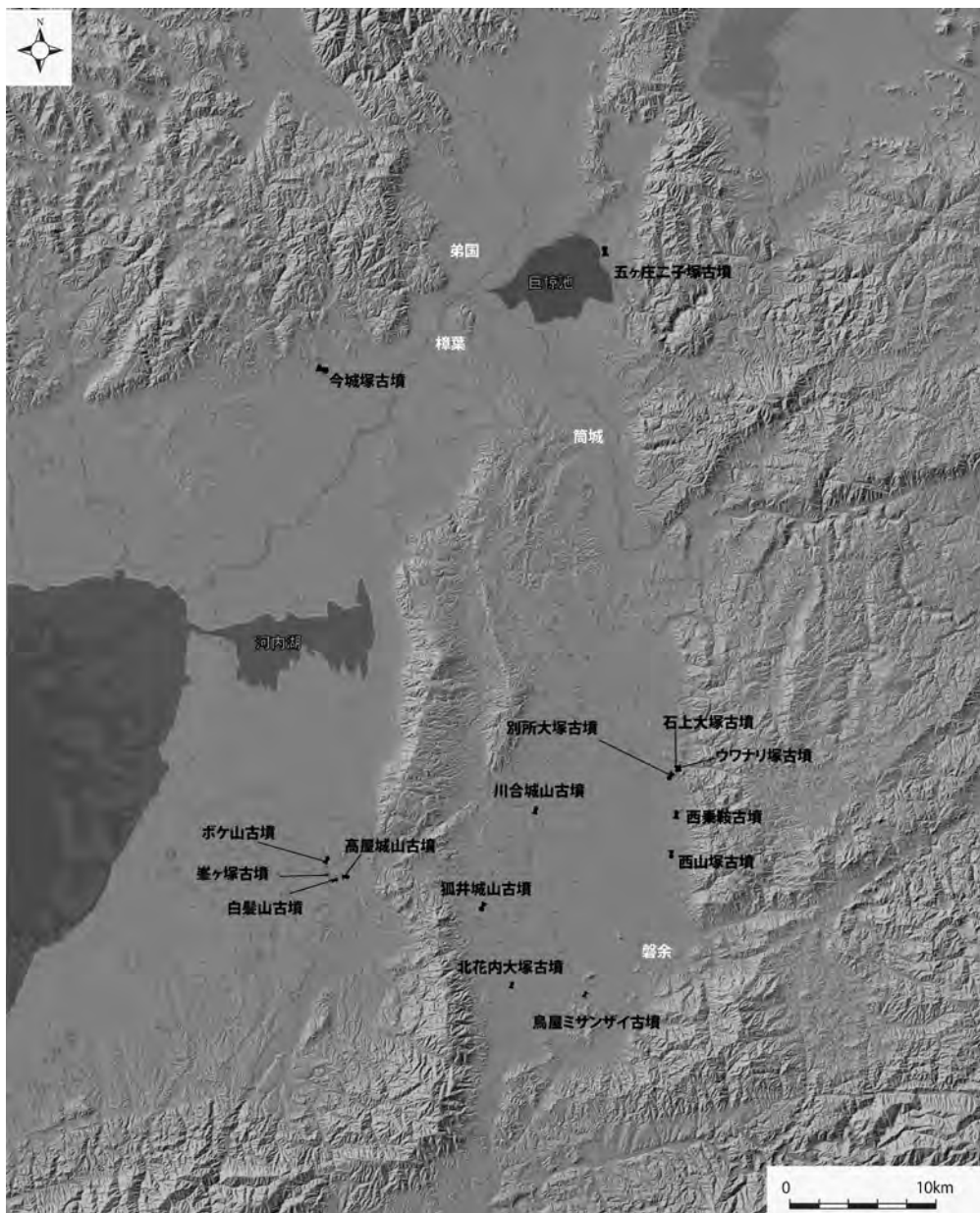


図13 継体政権前後の大型前方後円墳（墳丘長90m以上）

こうしたなか、隅田八幡神社蔵人物画像鏡の銘文を、山尾幸久氏の釈文に基づき、「癸未年（503年）、日十大王（仁賢大王）の時に、意紫沙加（忍坂）宮に居た即位前の孚弟王（継体）のために、斯麻（武寧王）が鏡を作った」と解釈する〔山尾1983〕と、早い段階に奈良盆地に拠点を構えていた可能性がある。それを裏付けるように、忍坂遺跡では、5世紀代の建物跡が検出されている。こ

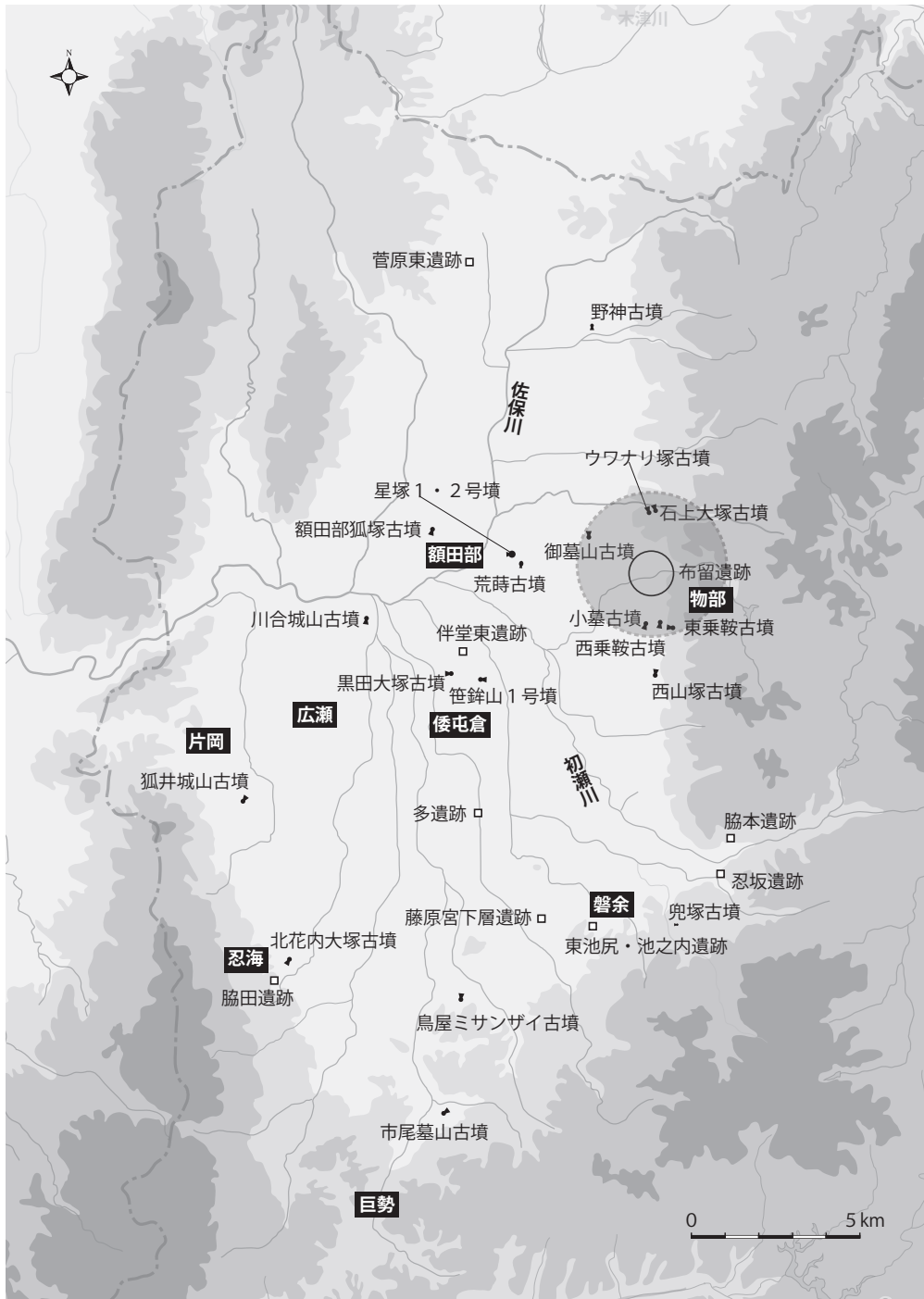


図 14 継体政権前後の奈良盆地の遺跡構造

れに近在するのが、前述の雄略（倭王武）の支配拠点と推定される脇本遺跡である。これら遺跡は、初瀬川上流域に位置し、大和川や陸路を通じた交通の要衝の地にある。また、継体の奈良盆地における宮は、磐余玉穂宮であるが、実態は明らかではないものの、東池尻・池之内遺跡の調査で、6世紀末～7世紀前半の磐余池の堤と考えられる遺構が確認された。磐余が、飛鳥と初瀬川上流域を繋ぐ位置にあたっていることは注目されてよい（図14）。

さらに、初瀬川と佐保川の合流点付近の交通の要衝に本拠をおいていたのが、7世紀の外交集団として名を残す額田部氏である。額田部氏の氏寺が額田寺で、奈良時代の額田寺伽藍並条里図は名高いが、そこに描かれた額田部狐塚古墳から、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の春季特別展の開催に伴った館蔵資料の整理からはじめて尾張系埴輪が確認された〔奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2015〕。これにより、額田部の在地集団が継体と早い段階に繋がっていた可能性が浮上した。

継体の元妃である日子媛は、尾張連氏の出身とされており、尾張地域の在地集団が継体擁立に深く関わったことは間違いないところであろう。東海地方最大の前方後円墳である断夫山古墳（墳丘長151m）が造営され、同じ熱田台地上の大須二子山古墳（推定墳丘長約100m）〔深谷2015〕、春日井市域の味美二子山古墳（墳丘長94m）など、継体期前後におけるこの地域の活発な造墓活動から、有力地域集団の存在が明らかである。のちに尾張連氏と称された有力地域集団が、この地域の肥沃で広大な農業生産基盤と、あゆち潟と呼ばれる港湾を掌握する一方、東山窯などで大規模な須恵器生産を開始するが、そのなかで、須恵器生産を応用したこの地域独特の埴輪生産をおこなう〔赤塚1991、辻川2014〕。尾張系埴輪と呼ばれ、尾張地域はもとより、継体の擁立に関わった近江地域・山城地域・摂津地域の在地集団に採用されている。額田部狐塚古墳では、墳丘に樹立されていた埴輪が、すべて尾張系埴輪であり、奈良県通有の埴輪は全くみられない。

一方、額田部狐塚古墳から、佐保川を挟んで東側（額田部東方地域）には、5世紀後半～6世紀前半代の百済系渡来集団の居住地である中町西遺跡・星塚遺跡などがあり、荒蒔古墳・星塚1、2号墳・水晶塚古墳など墳丘長30～50mほどの帆立貝式古墳や低墳丘の方墳が集中している。帆立貝式古墳の被葬者は、渡来系集団を統括していた階層であり、星塚2号墳の被葬者はあるいは渡来人そのものかもしれない。この額田部東方地域の集団のさらに上位にあったのが、居住地そのものは検出されていないが、墳形や立地環境などからみて、前方後円墳の被葬者であり、上述の額田部狐塚古墳（墳丘長50m）をはじめ、船墓古墳（墳丘長40～50m）・推古神社古墳（墳丘長40m）などである。

ところで、額田部東方地域の水晶塚古墳・星塚2号墳の埴輪は、佐保川を介して上流約12kmという遠隔地の奈良盆地北部の菅原東埴輪窯から供給されたものである。近在する菅原東遺跡は、古墳時代前期のヤマト王権の支配拠点である。6世紀初頭の継体政権の時にはそれに重なる形で、濠によって区画された掘立柱建物群が形成されていて、埴輪生産集団統括層の居館へと変貌したと考えられる。さらに、額田部狐塚古墳の埴輪が尾張系埴輪であり、継体を支えた尾張の在地集団と強く関連するものであるというこれまでの推定からするならば、継体政権は、額田部地域を完全に掌握し、佐保川・初瀬川の上流部に生産拠点や支配拠点をおいたと考えられる。なお、奈良盆地中央部が弥生時代以来の伝統的な穀倉地帯であるが、継体政権を前後して黒田大塚古墳（墳丘長86m）、笹鉾山1号墳（墳丘長88m）などの前方後円墳が築かれている。近在の伴堂東遺跡・多遺跡では、

継続的に集落が営まれ、開発拠点としてと意義づけることが可能である。ヤマト王権中枢の生産基盤としての「倭屯倉」は、原初的には古墳時代前期にも遡りえるが、この段階でようやく実態が遺跡構造としても明確化するといえる〔坂 2009〕（前稿1）。

継体政権が、奈良盆地に残した遺跡として忘れられないのが、手白香命の墓である。継体は、仁賢天皇の女を正妃とした。その陵は『延喜式』の山辺郡所在の衾田陵である。宮内庁は、大和（萱生）古墳群中最大の前方後円墳である西殿塚古墳に治定するが、年代が合致せず、同一古墳群にある西山塚古墳（墳丘長 120m）がそれにあたと考えられている〔白石 2009, 今尾 2012〕。すでに前期に築造された古墳でうめつくされた「おおやまと」古墳集団の故地に、その間隙を縫って築造されているのは、継体政権が当該地を重視していたからにほかならない。

大和（萱生）古墳群のすぐ北側には、布留遺跡を支配拠点とする有力地域集団が存在し、5世紀以降、拡大をつづけている。北側には石上大塚古墳（墳丘長 107m）・ウワナリ塚古墳（墳丘長 110m）などの前方後円墳を中核とする石上古墳群、南側に西乗鞍古墳（墳丘長 118m）・東乗鞍古墳（墳丘長 72m）などの前方後円墳を中核とする柚之内古墳群があり、これらが、物部氏と関わることは、多言を要しないだろう。『日本書紀』には、磐井の乱で磐井を斬殺したという物部麁鹿火の名があるが、継体政権がこの勢力と協調したことは想像に難くない。奈良盆地南部には、約 4000m² の方形区画に大型掘立柱建物を整然と配置する藤原宮下層遺跡があり、これは5世紀代の大型建物が廃絶したのち、6世紀前半代に形成されたものである。有力地域集団に関連する施設と推定され、私は大伴氏との関連を考えている。

さらに、巨勢谷とよばれる藤原宮下層遺跡から五条盆地・吉野川（紀ノ川）方面へむかう狭隘部には、7世紀代に巨勢氏が盤踞するが、その入り口部に、大型古墳の端緒となる市尾墓山古墳（墳丘長 70m の前方後円墳）が6世紀初頭に築造される。初期横穴式石室を埋葬施設とし、継体政権と時を同じくすることから、その実在性は疑問を持たれるものの、継体擁立に関わった巨勢男人の墓に関連づけられる。

また、5世紀に奈良盆地西南部の南郷遺跡群に支配拠点をおいた葛城の有力地域集団の後裔が、朝妻・忍海において渡来系集団と強い関わりを保ちながら、生産拠点を形成し、大型前方後円墳の築造を続ける。継体政権前後に築造されたのは、北花内大塚古墳（墳丘長 90m）であり、宮内庁は飯豊皇女の墳墓に治定する。その実在性は問われなければならないが、脇田遺跡・地光寺を拠点とする忍海の在地集団は、5世紀後半以降に勃興し、政権に対し大きな影響力を行使したと考えられる。

継体は、これら奈良盆地の諸勢力を必ずしもすべて統合したわけではないだろうが、これらと協調することによって、その政治力を発揮したと考えられる。ここにきて、ようやく大王を中心とした政治体制が確立していったものと考えられる。

このほか、奈良盆地においては西部の広瀬・片岡地域で、継体政権前後に狐井城山古墳（墳丘長 140m）、川合城山古墳（墳丘長 109m）の前方後円墳が築造される。ただし、この地域は古墳時代においては、大規模な集落遺跡が存在せず、有力地域集団の存在が明確ではない。馬見古墳群に端緒をなす、奈良盆地と大阪平野を繋ぐ位置に設けられた墓域であり、6世紀末以降は敏達王家の墓域となったと推定される〔坂 2015b〕（前稿8）。

この当時においては、朝鮮半島情勢も激動しており、隅田八幡神社蔵人物画像鏡の銘文にみられるように百済の武寧王と緊密な関係があった可能性も高い。阿蘇溶結凝灰岩製の石棺が今城塚古墳や奈良盆地の東乗鞍古墳・兜塚古墳・野神古墳などに採用されることとあわせ、継体政権は、瀬戸内海を通じて九州や朝鮮半島と繋がっている。一方、6世紀前半代の東国地域最大の前方後円墳である群馬県七輿山古墳（墳丘長145m）と今城塚古墳・断夫山古墳の墳丘規格の共通性や埴輪の類似性も無視できない〔若狭2007、山田2011〕。東国地域と尾張の有力地域集団が、継体政権と強く繋がっていたと考えられるのである。このように各地の有力地域集団と連携して成立した継体政権は、のちの畿内となる地域をはじめて手中におさめて、これまでにない強固な政権基盤を築きあげたのである。

2 6世紀後半の支配拠点と遺跡構造

奈良盆地最大の前方後円墳は、6世紀後半に築造された丸山古墳（墳丘長310m）である。全長28.3mという長大な両袖式の横穴式石室は、畿内型横穴式石室の典型的事例である。石室内には2基の家形石棺を安置する。この巨大古墳と、巨大な埋葬施設が、日本列島各地に多大な影響を与えなかった理由は何もない。畿内型横穴式石室はTK43型式期の丸山古墳を標識とした丸山式、続くTK209型式期の赤坂天王山古墳を標識とする天王山式、TK217型式期の石舞台古墳を標識とする石舞台式へと変化する〔坂2009〕。

そして、丸山古墳をランドマークに下ツ道が設定され、奈良盆地の遺跡構造に大きな変化をもたらすことになる。これまでの自然地形に制約された遺跡構造から、極めて計画的な正しい南北方向を指向したルートが確立されるのである。

丸山古墳の被葬者が、政権の最高実力者であることは間違いがない。当時の大王は、欽明である。『日本書紀』では、その宮は磯城嶋金刺宮とする。正妃は、蘇我稲目の女で、用明・推古の母である堅塩媛である。また、欽明の墓は、檜隈坂合陵（檜隈大陵）である。宮内庁は、丸山古墳の南にある平田梅山古墳（墳丘長140m）を欽明陵に治定している。檜隈の範囲や、古墳の被葬者について、諸説が提示されていることは周知のとおりである〔森1965、増田1991、和田1995、小沢2002、高橋2005、白石2015〕。私は、丸山古墳の被葬者は、欽明をおいてほかはないと考える。

磯城嶋金刺宮については、現段階では不明というほかはないが、城島遺跡で建物や溝などの遺構が検出されており、その関連性が示唆される。さらに、脇本遺跡では、6世紀後半代の大型掘立柱建物が検出されており、欽明の行宮である泊瀬柴垣宮の関連性が指摘されている。脇本遺跡から城島遺跡、磐余池推定地である東池尻・池之内遺跡の東側を経て丸山古墳へ至るルートが、ヤマト王権の支配拠点を繋ぐ基幹道であったと考えられる。『日本書紀』では、継体の磐余玉穂宮以降、推古から飛鳥に宮が固定されるまでは、安閑＝勾金橋宮、宣化＝檜隈廬入野宮、欽明＝磯城嶋金刺宮、敏達＝百済大井宮・訳語田幸玉宮、用明＝磐余池辺双槻宮、崇峻＝倉梯宮であり、このルートに沿って転々と宮が移動したように記載されていることは注目できる。もとより、宮についてはそれぞれ実態をともなっていたとは考えられないが、6世紀後半代のヤマト王権がこのルートを重視していた可能性は極めて高い。それは、飛鳥から東国へ至るルートであり、奈良盆地を南北に貫く下ツ道と丸山古墳北側の軽で衝を形成し、南へは巨勢谷の狭隘部を通じ、紀路へ連なるものである。継体

期にはすでに確保されていた大和川・河内湖・瀬戸内海へ至るルートとあわせ、7世紀以降に官道が整備される前段階の6世紀後半には、ヤマト王権の支配拠点を中心とするネットワークが機能しはじめたとみてよいだろう。ここにきて各地域に屯倉が設置されるなどして、ヤマト王権の地方経営がようやくその実態を伴うものとなったと考えられる。

このようにみるなら、6世紀後半代以降にはじめて、古墳の構造や埋葬施設について政権の支配構造と関連させることが可能になるのであって、とりわけ、奈良盆地の首長墳に採用された横穴式石室の構造をみると、政権中枢との影響関係が明白にあらわれていることにあらためて気づく(図15)。

丸山古墳の西南にあるのが貝吹山で、その山麓には、正方形に近いプランで天井の高いドーム形天井をもつ大型横穴式石室(飛鳥型)をもつ円墳が点在している。通有の畿内型横穴式石室とは異なる石室構造である。このうち、丸山古墳と同時期に築造されたのは、真弓鐘子塚古墳(直径40m)・沼山古墳(直径18m)で、それに続いて築造されたのが与楽鐘子塚古墳(直径28m)である。それぞれミニチュア炊飯具を副葬品としている点、特殊な石室構造である点などから、渡来人との関わりが想定されていて、東漢氏の墳墓として捉えられることが多い[白石2015]。周辺には、ミニチュア炊飯具を副葬し、同様の石室構造をもつこれらより小規模な円墳があって、古墳群を形成している。大型横穴式石室をもつものは、独立して立地しており、小規模な円墳の被葬者が階層的に下位にあることは明らかである。渡来系集団である東漢氏を麾下におき、最終的に政権中枢で権勢をふるった蘇我氏との関わりを考えるべきであろう。なかでも、石室高4.5mという日本列島でも有数の高さを誇る真弓鐘子塚古墳こそ、蘇我稲目の墓とするのに十分な条件を備えている。いずれにせよ、飛鳥・檜隈周辺の渡来人を麾下におき、飛鳥に本拠をおいた蘇我氏が、6世紀後半～7世紀前半のヤマト王権の実権を手にしたのである[坂2017]。

これに対し、畿内型横穴式石室の端緒と評価されている市尾墓山古墳の横穴式石室は、長方形プランで天井が低い。巨勢谷においては、天井が低く、前壁・奥壁のいずれもを持ち送る横穴式石室(巨勢谷型)が採用される。継体期に造営された市尾墓山古墳に続き、前方後円墳としては市尾宮塚古墳(墳丘長44m)、円墳としては権現堂古墳(直径30m)、新宮山古墳(直径25m)、水尾南古墳(直径30m)が巨勢谷型である。ただし、同じ地域にある水尾塚古墳(直径20mの円墳)は、奥壁・前壁の持送りをおこなわない垂直型であり、石室の壁面構成は丸山古墳や赤坂天王山古墳の横穴式石室の影響を強く受けていて、王権中枢と深い関わりのある被葬者像が想定できる。つまり、巨勢谷に盤踞した在地勢力は、一定の地域色を保ちつつも、王権中枢と深い繋がりを有していたことが窺える。この在地勢力が巨勢氏と関係することは多言を要しないだろう。

さらに、奈良盆地西南部の葛城地域では、天井が高く、奥壁を持送り、前壁を垂直に積む横穴式石室(葛城型)が採用される。6世紀前半に遡るのは円墳の笛吹神社古墳(直径25m)、つづいて前方後円墳の二塚古墳(墳丘長60m)、6世紀後半には北側で平林古墳(墳丘長62m)、南側で條ウル神古墳(墳丘長70mの前方後円墳か)が造営される。葛城地域の在地勢力は、一定の独自色を保ちながら系譜を連ねていったことが窺える。

奈良盆地西北部では、斑鳩地域では金銅製馬具・装身具など豊富な副葬品が名高い藤ノ木古墳(直径40mの円墳)が、垂直型である。また、平群地域の烏土塚古墳(墳丘長60mの前方後円墳)も

垂直型である。これらは、石積みが丸山古墳と類似しており、やはり王権中枢と深い繋がりをもつ被葬者像が想定できる。

奈良盆地東北部では、杣之内古墳群においては東乗鞍古墳で、ごく初期の畿内型横穴式石室が採用される一方、石上古墳群で石上大塚古墳・ウワナリ塚古墳で垂直型が採用されており、そのほかの前方後円墳である別所大塚古墳（墳丘長 127m）、岩屋大塚古墳（墳丘長 76m）の石室の様相はさだかではない。その後に築造された塚穴山古墳（直径 63m の円墳）は垂直型で天王山式の壁面構成をとり、ハミ塚古墳（東西 48.8m、南北 45.6m の方墳）の横穴式石室は石舞台式に該当する。河内愛宕塚古墳（直径 22.5m の円墳）が、垂直型で、丸山古墳に近い壁面構成をとることとあわせ、これらが6世紀後半～7世紀前半に政権中枢にあった物部氏の動静と一致することは間違いがない

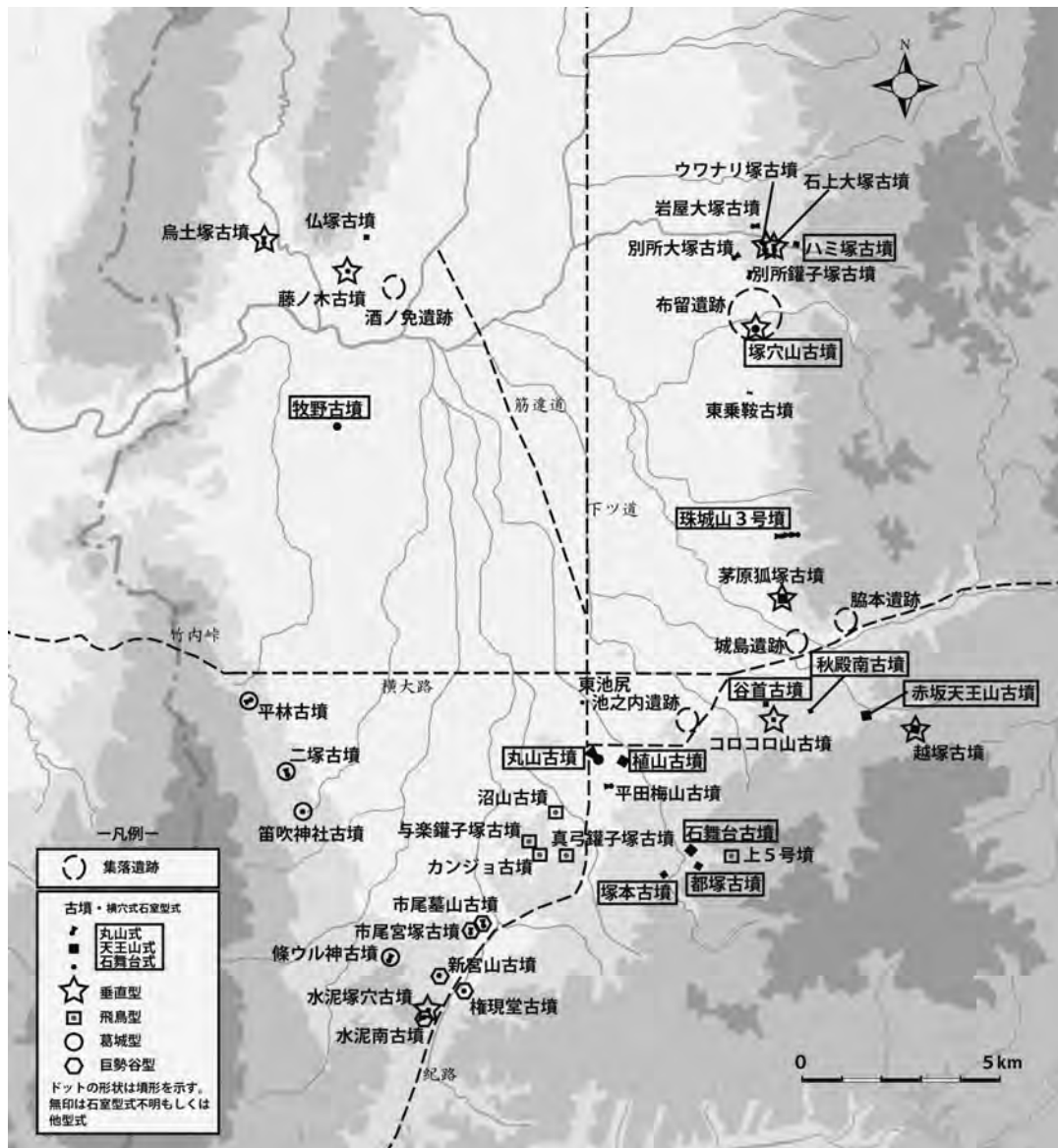


図 15 奈良盆地の横穴式石室（岩屋山式以前）・関連集落遺跡と官道

ところだろう [米田 2015]。

以上のように、ひとつ埋葬施設の構造をとってみても、丸山古墳の築造が奈良盆地各地の氏族層に大きな影響を及ぼしていることがしれるだろう。それとともに、この段階では在地勢力は、それぞれなお一定の地域性を保っていることも注意すべき点である。そして、天王山式の段階には、こうした地域色が薄れて、画一的な石室構造に統一されるのである。

天王山式の標識遺跡である赤坂天王山古墳（一辺 42m の方墳）は崇峻陵、代表的事例である都塚古墳（一辺 28m の方墳）は蘇我氏、牧野古墳（直径 40m の円墳）は押坂彦人大兄皇子、植山古墳（長辺 40 × 短辺 27m の方墳）は竹田皇子という被葬者が想定されており、牧野古墳・植山古墳東石室は全く同一の壁面構成をとる。このほか、垂直型で天王山式と同様の壁面構成をとるものとして、前述した水塚穴古墳のほか、越塚古墳（直径 40m の円墳）がある。

さらに、続く石舞台式・岩屋山式がそれぞれ地域を越え、画一的な壁面構成をとるものであることは多言を要しないであろう。特に 7 世紀前半代に導入された岩屋山式は、統一的な規範が、列島各地に「墓制」として浸透したといえる。

このように、奈良盆地の氏族層と大王の関係が古墳の埋葬施設の構造に明快にあらわれているのであって、6 世紀後半以降、氏族層と大王が親密な関係を徐々に結んでいったと考えられるのである。そして、渡来系集団を掌握した蘇我氏が台頭して、飛鳥に政権中枢がおかれるようになり、大王を中心とした専制的な体制がようやく確保されたのである。

結び

ヤマト王権の成立過程については、本文中に述べた日本列島各地の地域勢力が結集したとする説 [寺沢 2011, 森岡 2015] のほかに、空白の奈良盆地に、各地域の諸勢力が結集したとする説 [北條 2000] も提示されている。これらについては、下垣氏の批判 [下垣 2013] が時宜をえたものであり、奈良盆地中部・東南部の生産力 [桑原 2010] に、今一度目をむけるべきであろう。

倭国の原領域については、奈良盆地東南部から河内湖に至る大和川流域と捉える説 [白石 2009] が有力である。また、ヤマト王権の支配構造を説いた学説としては、前方後円墳体制論 [都出 1991] とそれを補強する立場での論説 [和田 1994] が著名である。さらに、前方後円墳を国家の成員権の表象とみる、前方後円墳国家論 [広瀬 2003] もある。それぞれが整然とした論理に基づいたもので、非常に説得力と魅力に富んだ学説である。いずれも、古墳の規模・墳形が、倭国の身分秩序や、中央と地方の関係を体現しているとする立場にある。

今回の検討は、ヤマト王権の端緒を奈良盆地中央部・東南部の一有力地域集団としてとらえ、それが成長し、広域支配を実現していく過程を遺跡構造のもとに描出したものである。これは、上記学説とは見解を異にしており、奈良盆地中央部・東南部のみの限定された地域を倭国の原領域と考える立場にある。また、一種の「カリスマ」的な首長が大型前方後円墳の築造をおこなったこと、歴代の「カリスマ」たちが前方後円墳の内在する要素を革新したこと、古墳の規模・墳形に一定の秩序が体現されていること、については認めるものの、ヤマト王権の支配構造や地方支配のシステムとして機能していたことは難しいと考える立場に立つ。まずは、ヤマト王権と有力地域集団の生

産基盤と支配拠点と古墳を有機的に連関させ、それぞれの支配領域や支配構造を明らかにすることが必要である。大型前方後円墳の出現とともに、弥生時代の地域社会が崩壊したというのは単なる幻想にすぎない〔坂2016b〕。

弥生時代の集落論においては、大規模環濠集落を一体とみなした拠点集落論に対し、社会学的検討から、小規模集落が結果的に集中したとみなす複合型集落論〔若林2001〕が提起されている。ヤマト王権の成立と関連づけるなら、大型建物や首長居館、あるいは古墳の出現と繋げて、集落の外部を含む一定の領域を支配した首長の出現をどの段階に求めるのかが議論の核心となる。

この場合、庄内式期においては、集落外に及ぶ広域支配を実現した首長の存在を確認することはできないといえる。そして、箸墓古墳の築造された布留式期以降もまた、近畿地方中央部の各地において、ヤマト王権と有力地域集団がその領域のなかで支配拠点を形成し、大型古墳群を造営しているという事実が確認できるのである。そして、その覇権をめぐる争いや、版図の拡張にあたって、個別の海外交渉における成果と、渡来系集団と関わる新来の技術と生産力を獲得したものが、強大な権力を保持したのである。

古墳時代の近畿地方中央部が、ヤマト王権の中核として語られ、それ以外を地域として捉えられることは多い。しかしながら、実態としてはその中核部にも古墳時代を通じて在地集団が割拠していたのであって、それぞれの在地集団ごとに弥生時代の伝統的基盤をそのまま受け継いだ地域社会を構成していたと考えられるのである。そして、絶大な生産力を背景にし、在地集団ごとの覇権をめぐる争いに勝利し、海外交渉の成果と新来の技術力と生産力を獲得した「おおやまと」古墳集団が、徐々にその支配を確固たるものにしていったのである。

「おおやまと」古墳集団とは出自を違える継体政権の登場により、ヤマト王権は、古墳時代後期に広大な生産基盤と複数の支配拠点を確保することによって、ようやく広域支配を実現したと考えられる。「おおやまと」古墳集団と融合することにより、それは実現したのである。そして、これ以降、奈良盆地の有力地域集団を淵源とする氏族層を傘下において、専制的な王権を確立していくのである。

引用・参考文献

- 青柳泰介 2007 「古墳時代の『山野河海』」『古墳時代の海人集団を再検討する』第56回埋蔵文化財研究集会資料集
青柳泰介 2011 「ワニ地域考」『考古学は何を語るか』同志社大学考古学シリーズX
赤塚次郎 1991 「尾張型埴輪について」『池下古墳』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
今尾文昭 2009 『古代日本の陵墓と古墳1 古墳文化の成立と社会』青木書店
今尾文昭 2012 「西殿塚古墳の提起する問題」『天皇陵古墳を考える』学生社
上野祥史 2008 「ホケノ山古墳と画文帯神獸鏡」『ホケノ山古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所研究成果第10冊
上野祥史 2014 「日本列島における中国鏡の分配システムと画期」国立歴史民俗博物館研究報告』第185集〔共同研究〕農耕社会の成立と展開—弥生時代像の再構築—
大阪府立弥生文化博物館 2015 『卑弥呼—女王創出の現象学—』リニューアルオープン記念平成27年度春季特別展図録
小沢 毅 2002 「三道の設定と五条野丸山古墳」『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所創立50周年紀年論集
柏田有香ほか 2015 「集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化」『古代学研究』205号
川上洋一 2006 「奈良盆地北端部における大安寺西遺跡の位置づけについて—とくに弥生時代について—」『平城京左京五条二坊十五・十六坪』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第98冊

- 川崎志乃 2014 「纏向遺跡における伊勢系土器の研究」『研究紀要』第18集 公益財団法人 由良大和古代文化研究協会
- 岸本直文 2014 「倭における国家形成と古墳時代開始のプロセス」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集 [共同研究] 農耕社会の成立と展開—弥生時代像の再構築—
- 北山峰生 2008 「精製土器群の成立とホケノ山古墳の位置」『ホケノ山古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所研究成果第10冊
- 久住猛雄 2007 「『博多湾貿易』の成立と解体—古墳時代初頭前後の対外交易機構—」『考古学研究』第53巻第4号
- 久住猛雄 2008 「福岡平野 比恵・那珂遺跡群—列島における最古の『都市』—」『集落からよむ弥生時代』弥生時代の考古学8 同成社
- 桑原久男 2010 「奈良盆地東縁における古墳群・集落の動向と東大寺山古墳」『東大寺山古墳の研究』東大寺山古墳研究会
- 古代学研究会 2014 『古代学研究会2014年度拡大例会シンポジウム 集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』資料集
- 清水琢哉 2015 「古墳時代前期の唐古・鍵遺跡」『古墳出現期土器研究』第3号
- 下垣仁志 2011 『古墳時代の王権構造』吉川弘文館
- 白石太一郎 2009 『考古学からみた倭国』青木書店
- 白石太一郎 2015 「明日香村都塚古墳の造営年代」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報18』
- 鈴木裕明 2007 「乙木・佐保庄遺跡出土土器について」『乙木・佐保庄遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第92冊
- 高橋照彦 2005 「欽陵と檜隈陵—大王陵最後の前方後円墳—」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室
- 高橋照彦 2013 「首長墳の被葬者像」『古墳時代の考古学6』同成社
- 伊達宗泰 1999 『「おおやまと」の古墳集団』学生社
- 田中史生 2002 「渡来人と王権・地域」『倭国と東アジア』日本の時代史2 吉川弘文館
- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ
- 趙哲済・市川創・高橋工・小倉徹也・平田洋司・松田順一郎・辻本裕也 2014 「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」『大阪上町台地の総合的研究—東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型』平成21～25年度（独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）
- 辻川哲郎 2014 「継体期の近江の古墳—埴輪を中心に—」平成24年度春季特別展『湖を見つめた王—継体大王と琵琶湖—』滋賀県立安土城考古博物館
- 次山 淳 2000 「纏向から佐紀へ—外来系土器組成の時系列的な比較—」『佐藤広史君追悼論文集 一所懸命』佐藤広史君を偲ぶ会
- 都出比呂志 1991 「日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱—」『日本史研究』第343号
- 寺沢 薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告
- 寺沢 薫 2011 『王権と都市の形成史論』吉川弘文館
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2014 『特別陳列 東海地方からの新しい風—古墳出現期の東海系遺物』
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2015 『春季特別展 継体大王とヤマト』
- 橋本輝彦 2007 『ヤマト王権はいかにして始まったか—王権成立の地 纏向』桜井市埋蔵文化財センター
- 坂 靖 2008 「奈良盆地の古墳時代集落と居館」『考古学研究』第55巻第2号
- 坂 靖 2009 『古墳時代の遺跡学—ヤマト王権の支配構造と埴輪文化—』雄山閣
- 坂 靖 2010a 「前方後円墳出現期の集落—奈良盆地における弥生時代の拠点集落の展開—」『考古学は何を語るか』同志社大学考古学シリーズX
- 坂 靖 2010b 「葛城の渡来人—豪族の本拠を支えた人々—」『研究紀要』第15集、(財)由良大和古代文化研究財団
- 坂 靖 2011 「ヤマト王権と奈良盆地の在地集団—古墳時代前半期の集落と古墳—」『勝部明生先生喜寿記念論文集』
- 坂 靖 2012a 「畿内」『古墳時代研究の現状と課題 上 古墳研究と地域史研究』同成社
- 坂 靖 2012b 「複合生産」『古墳時代の考古学5 時代を支えた生産と技術』同成社
- 坂 靖 2013a 「古墳時代中期の遺跡構造と渡来系集団」『古代学研究』第199号
- 坂 靖 2013b 「前・中・古墳の『治定』問題—市野山古墳と佐紀ヒシャゲ古墳を中心に—」『季刊考古学』第124号 特集 天皇陵古墳のいま

-
- 坂 靖 2014 「遺跡からみたヤマト王権と鉄器生産」『たたら研究』第53号
坂 靖 2015a 「継体大王とヤマト～奈良盆地北部の集落と古墳～」『森浩一先生に学ぶ 森浩一先生追悼論集』同志社大学考古学シリーズXI
坂 靖 2015b 「6世紀の大王と有力氏族～奈良盆地中・南部の集落と古墳～」『河上邦彦先生古稀記念論集』
坂 靖 2016a 『古墳時代の渡来系集団の出自と役割に関する考古学的研究』平成24年度～27年度科学研究費助成事業 基盤研究(C) 研究成果報告書
坂 靖 2016b 「古墳時代の集落研究からの視点—遺跡学的検討—」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房
坂 靖 2017 「蘇我氏の遺跡学—飛鳥と渡来人—」『古代学研究』211号
坂 靖・青柳泰介 2011 『葛城の王都 南郷遺跡群』新泉社
深谷 淳 2015 「断夫山古墳・大須二子山古墳の平面形の推定復元」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』
広瀬和雄 2003 『前方後円墳国家』角川書店
北條芳隆 2000 「前方後円墳とヤマト王権」『古墳時代像を見なおす 成立過程と社会変革』青木書店
増田一裕 1991 「見瀬丸山古墳の被葬者」『古代学研究』124・125号
森岡秀人 2015 「倭国成立過程における『原倭国』の形成—近江の果たした役割とヤマトへの収斂—」『纏向学研究』第3号
森 浩一 1965 『古墳の発掘』中公新書
森 浩一 1975 「群集墳と古墳の終末」『岩波講座 日本の歴史2』古代2 岩波書店
安井宣也 2007 「能登川扇状地における古墳時代開発史の検討～集落遺跡の発掘調査成果や周辺の古墳の様相をもとにして～」『奈良女子大学21世紀COEプログラム報告集』vol.17
山尾幸久 1983 『日本古代王権形成史論』岩波書店
山田俊輔 2011 「毛野の埴輪」『季刊考古学』別冊17 古墳時代の毛野の実像
米田敏幸 2015 「物部氏と蘇我氏—丁未の乱をめぐる遺跡と古墳—」『河内学』の世界』大阪経済法科大学
若狭 徹 2007 『古墳時代の水利社会研究』学生社
若林邦彦 2001 「弥生時代大規模集落の評価 大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に」『日本考古学』第12号
若林邦彦 2016 「集落研究からみた弥生から古墳時代の変化」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房
和田 萃 1995 「見瀬丸山古墳の被葬者」『日本古代儀礼と祭祀・信仰』上 塙書房
-

図の典拠

- 図1・4・6・9～12・14・15 筆者作成。
図2 久住2008・橋本2007をベースマップに筆者作成。
図3 榎原考古学研究所附属博物館2014を引用。
図5・7・8・13 河内湖周辺の地形については趙ほか2014をベースマップとして筆者作成。

(奈良県立榎原考古学研究所附属博物館, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2017年3月23日受付, 2017年7月31日審査終了)

Powerful Regional Clans Forming the Mainstay of the Yamato Polity : Expansion of Influence of the Ōyamato Tumulus Clan

BAN Yasushi

This article examines the dynamics of and relationships among tumulus, settlement, production, and ritual sites in the Nara Basin and other areas in the central Kinki region to elucidate the regional structure (the relational structure of archaeological sites) and thereby explains the production base and regional government hubs of the Yamato polity and the process of expanding its influence.

In the Yayoi period, the Ōyamato area had the highest productivity in the Nara Basin. Its upper river basin is home to the Makimuku archaeological site, which dates back to the Shōnai-style Pottery phase. In the following Furu-style Pottery phase, the clan based at this site expanded, with the construction of large keyhole tombs at the Hashihaka Tumulus site and the Ōyamato Tumulus cluster. It was the origin of the Yamato polity. The powerful regional clan (known as “Ōyamato Tumulus clan”) that had established a production base in Ōyamato gained power in the region in the Furu-style Pottery phase and built tombs across the region, including tumulus clusters in Yamanobe and Shiki. The Yamato polity, originated from the Ōyamato Tumulus clan, gradually strengthened its position and expanded its influence by advancing into new areas.

The relational structure of archaeological sites indicates the coexistence of dominant local clans across the Kinki region, the rise of the Saki Tumulus clan based in the northern Nara Basin, and the emergence of local clans serving as mediators between the Ōyamato and Saki Tumulus clans in the Furu-style pottery phase. Among these clans, the Ōyamato and Saki Tumulus clans seem to have played a leading part.

In the fifth century, the Ōyamato Tumulus clan won over local clans in Kawachi, further expanded its influence, and acquired diplomatic authority to represent the Yamato state. The Yamato state expanded its production base across the extensive Yamato River Basin and interspersed regional government hubs around the area. It is, however, presumed that the domination of the Yamato polity was based on an unstable balance of power among the influential regional clans thriving in the Kinki region.

This situation changed drastically under the reign of Emperor Keitai, a descendant of the Ōda Chausuyama Tumulus clan. This powerful regional clan originated in the northern bank of the Yodo River further expanded the production base of the Yamato Polity across the extensive Kinai region by

establishing alliances with other influential regional and local clans in the Kinki, Hokuriku, and Tōkai regions. The merger of these clans and the Ōyamato Tumulus clan in the late six century established an absolute monarchy that governed the Yamato state while exercising its strong influence over the clans in the Nara Basin.

Key words: Yamato polity, the relational structure of archaeological sites, the Ōyamato Tumulus clan, the Saki Tumulus clan, local clan, powerful regional clan, reign of Emperor Keitai